

【論文】

埼玉県東部地方の方言分布と世代差（１）

- 語彙の分布 -

亀田 裕見

Differences between Generations
in the Linguistic Atlas of Eastern Saitama Prefecture (1):
with Special Reference to Vocabulary Distribution

KAMEDA, Hiromi

要旨：埼玉県東部における高年層と中年層の２世代の言語調査によって得られた方言分布より言語地図を作成し、県東部の中での言語境界や近隣県との繋がりを明らかにする。また、世代差を見ることで方言の変化と共通語化の状態を捉えようとするものである。

キーワード：埼玉県方言、関東方言、方言分布、方言区画、世代差

１．はじめに - 埼玉東部の背景と先行研究 -

本研究は、埼玉県東部における２つの世代の言語調査によって得られた方言分布より、県東部の中での言語境界や近隣県との繋がりを明らかにし、さらに世代差を見ることによって方言の変化を捉えようとするものである。

１．１．地理的特徴

埼玉県は、東西に長い形をしており、西部の山岳地帯をのぞけば、ほとんどが関東平野の一部をなす平坦な地形である。県を分断するような大きな自然地形はない。県の北部に利根川があり、これは群馬県や栃木県との県境になっている。県内の川で大きいものには荒川があり、県の西部から東部に向かって大きく蛇行して流れている。井上（1982）でも述べられて

いるように、埼玉県では川や、人工的に作った堀は、水路として活用され、むしろ交通の便になっていた。荻野（1993）でも中川流域について述べられており、埼玉県下では河川が言語の積極的な境になっていないことを指摘している。

大橋勝男・飯豊喜一（1971）の九学会連合による利根川流域についての研究では、流域における文法事象の分布を示すほか、利根川を挟んで向かい合う二つの集落（千葉県野田市瀬戸と茨城県相馬郡守谷町野木崎字向崎）の言語比較で相違点があることを指摘し、利根川が「伝達性よりも遮蔽性の優位なること」を指摘する。しかし同じ書の別章、井上史雄ほか（1971）に掲げられた語彙に関する方言分布地図からは、利根川を境界として言語事象が分断される項目は見当たらなかった。

本研究の調査対象とする県東部はこの利根川を栃木県・群馬県・茨城県との境とし、南と西は荒川が流れる。荒川が流れる、または接する地点は、鴻巣市・北本市・桶川市・上尾市・さいたま市・戸田市・川口市であり、南部では東京都との境界になっている。荒川の支流である元荒川が本研究の対象領域の中央を流れており、行田市・鴻巣市・菖蒲町・桶川市・蓮田市・白岡町・さいたま市岩槻区・越谷市を蛇行しながらもおよそ南西方向に流れる。他にも古利根川・島川・葛西用水・見沼代用水・綾瀬川があるがいずれも南北方向の流路を持つ。

1.2. 歴史的背景

この地域の歴史的背景で特徴的なことは、方言が閉鎖的な空間で発達してきたわけではないということである。古くは東京都とともに東国地方の中の武蔵国の一部であった。江戸時代にも強豪な藩に統括されていない。重田正夫（1993）によると、文政年間（1818-1829）に作成された『新編武蔵風土記稿』には荒川以東には37にのぼる領があったという。具体的には、忍（行田）に松平忠吉、羽生に大久保忠隣、松平康重、岩槻に高力清永の大名が置かれていたが、残りの地域は細かく分けられた旗本知行地であった。

交通の歴史は江戸時代までは荒川・元荒川をはじめとする河川の水運のほか、各地に多数あった人工水路による水運が盛んであった。鉄道が敷かれたのは明治になってからである。老川慶喜（1993）によると、明治10年代後半には日本鉄道会社によって、現在の高崎線、宇都宮線にあたる路線が開業している。現在の東武線にあたる地域の交通は、まず千住馬車鉄道が明治26年に開始したが、明治30年に廃止、その後を次ぐ形で設立した草加馬車鉄道会社も明治33には解散した。東武鉄道はこれらに並行して明治32年に営業を開始した。以後埼玉東部を縦貫する路線として、旅客輸送・貨物輸送ともに発展していった。

現代の埼玉の交通の基盤になる鉄道・幹線道路は、首都圏と地方をつなぐ南北に走るものと、県の東西を結ぶものがある。埼玉在住者が日常的に使用しているものとしては、前者に国道254号線（川越街道）、国道17号線（中山道）、国道4号線（日光街道）、JRの宇都宮線・京浜東北線・高崎線、埼玉新都市交通のニューシャトル、東武鉄道の伊勢崎線・日光線、埼玉高速鉄道線がある。後者は国道16号線、国道298号線、JR武蔵野線、東武鉄道の野田線がある。本稿の調査地点はJR宇都宮沿線と東武伊勢崎線沿線を中心にしてている。

1.3. 先行研究の分布地図

『日本言語地図』（以下本稿では略してLAJと呼ぶ）と『方言文法全国地図』（以下GAJ）は、国立国語研究所の主導により多数の研究者を調査員として動員し、また地図化に当たっても一定の手続きを共有して作られた日本で最大の調査領域を示す方言分布図である。LAJの調査は1957～1964年までの8年間で費やされて行われており、話者は1903（明治36）年以前生まれの男性である。GAJは1979～1983年に調査が行われており、話者は1931（昭和6）年以前生まれの男性である。

大橋氏の『関東地方域方言事象分布図』（以下大橋資料）では、大橋氏自身が全地点を調査している。調査期間は1966～1969年、話者は1966年時点で数え年60歳代の生え抜き女性である。LAJよりやや若い世代である。

柴田（1984）の調査（以下柴田資料）は東京都の北部とそれに接する埼玉県の中南部を対象としている。調査期間は1980～1982年で、調査地点はきめ細かく、552地点である。本地図と重なる地域は、さいたま市・川口市・蕨市・戸田市・岩槻市である。重複地域は狭いが、地点数は柴田資料の方が細かく設定されていて、この5市だけでも157地点調査されている。話者は生え抜きで年齢が調査当時65歳以上の男女で、平均すると1908.3（明治41）年生まれであるという。荒川以東でも以西でも、南から北へ向かう「ことばの流れ」があるという。東西方向の流れを示す語形もあるが、僅かだという。

九学会連合の利根川流域の調査で本地図と重なる地域は、井上史雄ほか（1971）によると、9地点ある。調査全体の地点数は105地点で、年齢は明治22年から36年までの生まれの男性が9割を占める。地図化してある項目は少ないが、利根川を挟む近隣県との関係が読み取れる。

本稿調査の高年層話者は、L A J に比べると一世代若く、G A J に比べるとやや若い世代である。

2．調査の概要と地図化の方針

2.1 調査と話者

調査時期は2001～2004年であり、2009年に5地点を追加調査した。調査地点名は、平成の大合併で多くの市町村の統合がなされたが、本稿では2001年時点での市町村で表示する。高年層の調査地点は75地点80人、中年層は64地点67人である。人数の方が多いのは、同じ地点で複数人調査した地点があるからである。話者は、市町村の教育委員会や公民館などに、地元生え抜きの話者の紹介を依頼した。具体的な依頼条件は市町村のさらに町名・大字名を指定し、そこに生まれ現在も住んでいる65歳以上の男性と35～45歳の男性とした。男性に統一したのは結婚などで転居せず、生え抜き話者が得られやすいためである。ただし1名女性がいる。この女性は結婚で転居していない生え抜きであるので例外的に採用した。むしろ、男性は

結婚による転居がないものの、自宅の周りの生活圏から離れたところに職場があって通うことがあるという問題がある。したがって高年層の男性の多くは、壮年期に地元から離れた職場に通っていたが、退職後また地元に戻るという生活をしている人が多い。そのためか、日常的に方言を積極的に使っているのは女性の方が多いようである。男性話者は、方言語形をすぐには答えられず、誘導によって思い出すというケースが多い。実際の調査の席では、同席した妻の方が質問に先に答える、また妻から誘導されるということは珍しくなかった。

調査地点数は前述の通りであるが、先行研究の調査地点で本研究の調査範囲に相当する地点を数えると、L A J は12地点、G A J は2地点、大橋資料が9地点、柴田資料は前述の通り157地点である。本稿の調査は柴田ほど密度が高くないが、L A J ・ G A J ・ 大橋資料に比べるとかなり密度の高い地点数になっている。地点の間隔が2キロ程度というところもある。地点名は末尾に示す。^(注1)

調査した話者の人数は前述の通りであるが、さらに詳しく特徴を述べると、高年層は2010年時点で平均79歳（1931（昭和6）年生まれ）で、調査時年齢の平均は72歳である。中年層は2010年時点で平均50歳（1960（昭和35）年生まれ）で、調査時年齢の平均は42歳である。話者の生まれと言語形成期および現住所はそれぞれの当該地点、つまり生え抜きであり、実の父母のいずれかがその土地の出身である。

2. 2. 調査項目と調査方法

調査項目は語彙項目と文法項目に分かれる。項目の選定はL A J とG A J を検討し、埼玉県内あるいは埼玉県近くに方言語形が複数存在する項目を抽出した。また井上（前掲）の記述より追加した項目もある。

調査の方法は、調査者2名^(注2)が話者のご自宅に伺って直接話を聞く面接式をとった。質問方法は、語彙項目はなぞなぞ方式で行い、必要に応じて絵も使用した。

文法項目は場面説明を加えた共通語翻訳式で行った。L A J ・ G A J と

同じ項目は質問の文言も同じにした。最終的な調査項目は、語彙項目が40、文法項目が23である。具体的な調査語形は本稿末尾に掲げる。これらの内、調査した結果、全地点の回答がほとんど全く同じである項目や調査方法が統一されておらず回答に均質性がなかった項目は地図化の対象としなかった。具体的には語彙10項目、文法2項目である。(注3)

2.3. 地図化の方法と語形の採否

地図化の方法は大西(2002)を参考にした。イラストレータに白地図を載せ、そこに調査地点番号をプロットし、地点番号を記号(スウォッチ)に置き換えるという方法である。イラストレータに組み込むプラグインと地図用記号は国立国語研究所の公開サイトより引用した。(注4)

各地点ごとの回答語形の採否は、自ら答えた語形の外、調査者や同席者から誘導された語形も、本人自身が「使う・使った」と答えた場合採用した。ただし、「聞いたことがある」という回答は採用しなかった。どこで誰から聞いたのか特定出来ないためである。しかも、本稿の調査は地点が密であり、仮に聞いた相手がすぐ隣町の人であっても、その聞いた語形を採用すると本来の分布を得られない恐れがあるからである。なお、同一地点に2人の話者がある場合、全員から同じ語を回答されたら一つの回答とし、異なる回答があったら同一地点の併用語形として扱った。また、妻の答えた語形は参考までに記録を取ってあるが、男性話者本人自身が使う、使ったと答えない語形は地図化では採用していない。

3. 分布図の解説

以下、語彙の30項目について、解説する。まず高年層の語形と分布を中心にL A Jや大橋資料・柴田資料と比較しながら概観し、その後で中年層について言及する。また、記述の中で項目は括弧付きひらがなで、得られた語形は片仮名で表示する。

<地図1「ものもらい」>

ごく北部にメケゴが分布。メボシが1地点。俚言形がある地域はL A J

とほぼ同じだが、メケゴという語形ではなくメカゴやメカイゴである。大橋資料でもメケゴはない。大橋資料によるとメカゴを分断する形でメカイゴが埼玉北部から栃木に分布していることから、メカゴだった地域にメカイゴが新出し、さらに母音の融合がおきてメケゴとなったと推定される。中年層には俚言形がほとんど継承されていない。南河原村のメツパは大橋資料で県中部に確認される。

<地図2「くるぶし」>

くるぶしは～ブシ・ボシ系と～コブシ系に分けられる。～ブシ・ボシ系は全域に分布している。二等辺三角形の～コブシ系が分布するのは南部である。このコブシ系はLAJの県内では見られない語形である。全国的には東北地方に多く分布する。LAJより調査地点密度が高いために埼玉東南部でもこの語形での使用が確認されたのであろう。LAJでは北部にクロボシ、南部にクロブシという対立になっている。共通語形のクルブシの影響か、本地図では～ボシ対～ブシは見られなくなっている。LAJの二音節目は「ロ」であることから、「ロ」の方が元々の埼玉県方言であると思われる。その他、クルブシの内側と外側を言い分ける地域がある。調査時に示した絵は外側を指していたので、ソトクロブシ・ソトクロボシの語形がその地点を表す。これも南部に多い。中年層にはほとんど俚言形は継承されていない。

<地図3「まゆげ」>

全域にマミヤが分布する。特にJR高崎線以東に分布し、県東部を代表する俚言と言ってよいだろう。マミゲも鴻巣市・北本市・桶川市の西部や、南部に点在する。LAJではマミゲが県中部から北部さらに群馬へと分布しているところから、県東南部には県中部から伝わってきたのではないかと考えられる。あるいは共通語「マユゲ」からの類推で、最後の音節「ヤ」が「ゲ」(=毛)に変わった可能性もある。LAJをダイジェストして解説を加えた『方言の読本』(1991)では、関東でマミアイ>マミエ>マミゲの順に変化したと推測している。中年層にはほとんど俚言形は継承されて

いない。

<地図4「おたまじゃくし」>

南部を中心にオタマが分布するが、北部には俚言形が少ない。庄和町から鷲宮町までの南北の中間地帯にオタマッコとオタマゲーロがある。オタマゲーロはLAJでは埼玉近辺にしか分布していない語形である。県全体に分布しているようだが、本地図では北寄りに分布し、南部にはない。オタマゲーロはオタマジャクシでも、特に足が生え始めたものを指すという話者の説明もあった。LAJで埼玉県東部をみると、北部に福島県や中部地方にも見られるオタマッコがあり、南部には県のほぼ全域を占めるオタマが分布する。このオタマは、埼玉県を挟んで東京から群馬まで広がっている。中年層の南部でオタマが残るのは東京にも分布する語形だからであろうか。共通語のオタマジャクシの下略形として認知されやすかったのであろうか。しかし中年層でも、武蔵野線より南ではほとんど聞かれない。

柴田資料によると、オタマガエル類は全域に分布している。LAJと同じである。の中でさいたま市の南部、旧浦和市の周辺には本地図には無い語形、オタマッコロが固まって分布している。オタマッコは川越の北部と狭山や東京の多摩に分布がある。この語形は前述の通り、LAJによると埼玉県だけでなく福島・関東・中部・近畿・中国・四国地方に広く分布する。この離れた地点間相互に伝播関係を認めるのは難しい。独自にそれぞれ発生したと見るべきであろう。埼玉県においては東京都と連続した分布の一部をなして県南部に集中して存在すると見てよいだろう。

<地図5「かまきり」>

ごく南東部にゴンベ(ー)があり、北部にカマギッチョがある。南北の中間地帯は俚言形が少ない。僅少な語形にハラタチゴンベーやハラタチババーなどのハラタチ系がある。この虫が鎌のような前足を振り上げる動作が怒っているようであるところから付いた名前であろう。ゴンベーはその上略と見られる。

旧来、埼玉県では「かまきり」のことをトカゲ、「とかげ」のことをカマ

キリと呼ぶという指摘がある。その指摘通りにトカゲを使うのは本地図では1地点しかない。L A Jをみると埼玉東部の北にもトカゲやトカエが見られる。大橋資料には、千葉県・茨城県・東京都および埼玉中部でトカゲとある。トカゲに囲まれながらも、埼玉県東部にはない。大橋資料でもハラタチ系はやはり東部の南にある。カマギッチョはL A Jでは県内になく、群馬県や栃木県に分布がある。L A Jには他にハラタチが北部に、ハラタチゴンベーが南部にある。柴田資料でも、さいたま市付近はハラタチゴンベ類が分布している。本調査の前にこの語形は消えてしまったと推測される。柴田資料では、さらに西の川越以西でオマンバカバカという語形が分布する。少なくとも、「かまきり」をトカゲと言わないことが埼玉東部の特徴となったようである。

< 地図6 「とかげ」 >

前項で述べたように、「かまきり」と語形が交替するといわれている「とかげ」の分布は、本地図ではカマゲッチョとカガメッチョという似た語形が全体に分布している。カマゲッチョは武蔵野線より北に、カガメッチョは武蔵野線以南に分布している。前項「かまきり」で、すでにカマギッチョを使うと答えた話者は「とかげ」の方をカマキリと言って似た語形にならないように使い分けている。1地点、桶川市川田谷だけはどちらの項目もカマギッチョで区別がない。他にはカナヘビという回答が見られる。

L A Jでは県東部全体にカマギッチョがあり、県南部にカガミッチョがある。カガミッチョはそのまま南の東京都・神奈川県まで分布している。本地図のカガメッチョにつながる語形だろう。東京・神奈川のカガミッチョが、埼玉では3拍目の音節がメになっている地点の方が多い。L A Jでも埼玉の北南端に2地点カガメッチョがある。母音/i/と/e/の相違であるが、いずれも前舌狭母音という単に類似した音のために変化した可能性もあるが、北部にあるカマゲッチョも3拍目の母音が/e/であるので、その影響で出来た中間的語形かと思われる。大橋資料でも同じで、埼玉は全体にカマギッチョ、浦和に1地点のみカガメッチョがある。柴田資料では岩槻

にカマギッチョが、さいたま市周辺ではカガミッチョが、さらにその西にはハガミッチョ、川越市西部ではチョロチョロヘビが分布している。

カナヘビという語形は中年層に残っている。むしろ地点数はやや増えている。背の青い「とかげ」と全体が茶色の「かなへび」の区別はなく、両者をカナヘビで言い表す。そもそも背の青い「とかげ」自体をほとんど見なくなったという指摘が多い。

< 地図7 「四角い(箱)」 >

LAJによると埼玉のほぼ全域に連体形で「～ナ」という形を取る項目である。ただし東部ではシカクイと併用されている。本図でもシカクナは全域に分布し、シカクイも併用されている。しかし、示した絵が長方形の箱だったため、ナガシカクナやチョーホーケーナという語形も聞かれた。両語とも分布では伊勢崎線沿線以外の全域に点在する。伊勢崎線沿線にシカクナ以外の語形があまり聞かれないのは興味深い。ナガシカクナやチョーホーケーナは、「長方形だ」「長四角だ」というように断定辞「だ」が活用したものというより、「シカクナ」という語形の末尾だけを継承した、新しい語形であろう。伊勢崎線沿線ではシカクナが強い勢力をもって分布して、新語形の入る余地が無かったのか、あるいは逆にシカクナの語形末尾を、新しい語形である「ナガシカク」や「チョーホーケー」につけるといふ発想が生じなかったためであろうか。それでも、中年層ではナガシカクナはほとんど姿を消し、チョーホーケーナやナガシカクナになっている。

< 地図8 「しおからい(塩の味)」 >

全域でカライとシオカライおよびショッパイが併用されている。高年層のみならず、中年層もカライ・シオカライを使っている。LAJでも県下はこの3語形の併用で、東部はカライ・シオカライの2併用で、南にシオカライがあるようであるが、本地図ではシオカライも南部だけの語形とは言えない。LAJで日本全体を眺めると、東日本でショッパイ、西日本でカライが分布し、関東はちょうどその接触地帯で両語が混在する地域である。例外的に東北部の日光線沿線にはカライが見られない。LAJを確か

めると千葉県や茨城県にはカライが分布していない。この北東部は言語領域として埼玉県より、隣接県寄りの言語使用となっているのであろう。

< 地図9 「すっぱい(梅干しの味)」 >

全域に共通語のスッパイと並んでショッパイが分布する。中年層でもほぼ同じである。地点の少ない語形として、カライ・シオッカライがある。前項目「しおからい(塩の味)」と同じ語形が使われている。塩の味と梅干しの味の語形が同音衝突しているわけだが、中年層でそれを解決しようという変化も見られない。これは、質問文で「梅干しの味」と聞いているためであろうか。質問文は「L A J」と同一にしたため「梅干し」の味を尋ねたのだが、梅干しは酸味より塩分を感じて回答される可能性がある。ショッパイやシオッカライの語形の分布にはその点を考慮しなければならない。

L A Jにより日本全体を見ると、東北でスカイ、関東でスッパイ、中部近畿でスイ、それより西でスイーとなっている。しかし、埼玉県では関東方言のスッパイを使う他にやはりショッパイを併用しており、本地図と符合する。

< 地図10 「<塩味が>うすい」 >

全域に高年層ではアマイが分布している。中年層は東武線沿線を中心としてアマイがあるが、ほとんどウスイになりつつある。中年層でアマイを使わない地点では、汁物の塩気が足りないことを言い表す特定の語形がなく、「塩けが足りない」という表現を用いるところもある。L A Jによると東日本はアマイが広く分布し、関東はアマイとウスイの併用地域である。さらに県東部に注目すると、南がアマイの単用、北がウスイ・アマイの併用になっている。本地図ではそこまで東部の南北で分かれる分布にはなっていない。本地図では菖蒲町辺りが高年層も中年層もアマイを使っていない点がかかる。

< 地図11 「疲れた」 >

L A Jにない項目である。全域にカッターイと共通語ツカレタが併用されている。ケッターイという語形が桶川市・幸手市以北に分布し、それよ

り南部ではダルイ・ダリーという語形が分布するという南北の対立が見られる。ただし、北部でも行田市・鴻巣市・北本市という西側ではダルイもある。ケツタルイは県北東部の特徴ということになる。中年層では、南のダルイが増え、北のケツタルイが減ってきている。

< 地図12「正座する」 >

伊勢崎線沿線より東にオチャントスワル・オチャントスルが分布しているのが特徴である。チャントスワルとカシコマルは全域に分布している。オチャント～という語形は誘導で得られることが多かった。複数の話者の説明によればオチャントスルは子供に対して使う幼児語であるという。中年層にはもう継承されていない。L A Jでも同様に、全体にカシコマルが分布し、東部の東端にオチャントスワルが分布している。

< 地図13「あぐらをかく」 >

全域にアグロ（オ）カクが点在しているが使用地点数が少なく、高年層でもすでに衰退を始めているようである。中年層にこの語形は継承されていない。アグラ（オ）クムは高年層では少なく、逆に中年層の方で多く聞かれる。ただしほとんどの地点が共通語のアグラオカクと併用である。動詞部分がカクかクムかの違いはL A Jでは目立たない。クムを使うのはL A Jでは県中央部に1地点あるのみである。共通語化でアグロがアグラになったが、動詞部分にはカクを特定的に選ばないということになる。むしろ、実際に足を組んでいるわけで、クムと言うことは理にかなっているという話者の判断なのであろう。共通語と同じアグラの後でもカクでよいところをあえてクムにするのは、過剰修正的な面があるといえる。

< 地図14「捨てる」 >

全域でウツチャルが使われており、中年層もこの語形をよく用いる。南部にはこれと併用してさらにホップルが分布している。中年層にも用いられている。全体に、世代差のない点の特徴である。L A Jにはウツチャルがあるが、ホップルがない。ホップルは新しい語形なのか、たまたまL A Jで拾えなかった語なのか。本地図では世代差がみられないので断言でき

ない。

< 地図15「おんぶする」 >

LAJで東日本に広く分布するオブーが本地図でも全域に分布する。ここに併用して、幸手市・北本市以北にブーがある。代表的な俚言形のブッチャル・ブッチャスも全域にあり、春日部市・越谷市では発音がブツァスになる。しかし、LAJではこのブッチャ～という語形は見られない。意外に新しい語形なのか、それとも、北関東方言に多い接頭辞の「ブッ～」を冠した語と同種のものと考えられ、くだけすぎた語として調査回答にふさわしくないとLAJの話者が判断したのだろうか。中年層は東端の幸手市を除き全域でオブルが使われている。オブーの活用語尾が、動詞に多いラ行五段活用の影響をうけて「ル」になったものであろう。幸手市以北の東端にオブルがないのは、この地域が隣接する茨城県とのほうと通じているからであろうか。

< 地図16「くすぐる」 >

幸手市・騎西町以北にクツグルが分布している。それ以南は俚言形としてムグス・モグスが1地点ずつあるだけである。幼児に対してつかうコチヨコチヨスルは全域に点在する。しかし、LAJを見ると、クツグルは県中央南部に1地点あるのみ。また周辺の千葉や茨城栃木にもこの語形はない。実際は埼玉の中部から東部の広い地域でクツグルは使われていたのではないだろうか。中年層ではクツグルが減り、ほぼ共通語化している。1地点ずつあるコチヨグル・モチヨグルはコチヨコチヨスルやモグスから、前項目のオブルのように、動詞の活用の中でも所属語が多いラ行五段活用になったものであろう。

< 地図17「においをかく」 >

ニオイオカクかニオイカクというように、動詞部分が「嗅ぐ」ではなくカクという語形が全域に見られる。助詞の「オ」を用いないニオイカクは春日部市・上尾市以南に多い。LAJでは県内の助詞なしは2例しかなく、地域の偏りはない。助詞なしは隣の茨城県に広がっており、埼玉東部は茨

城県の方言の広がりの末端に属すると見るべきものであろう。動詞カクは県北部にみられ、東部では北部のみならず南部にまで分布している。本地図で全域に広がっているのと同様である。しかし大橋資料ではカクは県の東北部にしかない。境界は荒川である。話者の年代が最も若い本地図の老年層で、これだけ南部でもしっかりカクを使用しているのはなぜであろうか。調査方針の違い、特に誘導しているかどうかの違いのためであろうか。本地図中年層ではほとんど共通語化してカクは少ない。

< 地図18「糸」 >

本地図ではほとんど共通語と同じであるが、東北部にヌイトス、その他の地域、特に越谷市にヌイトが散見される。中年層に至ってはさらに共通語形と同じになり、ヌイトスの地点はなく、越谷市にヌイトが残る。LAJでは本地図には現れなかった語形イトソ・イトソーがわずかながらある。本地図に東北部にあるヌイトスは県の北部から群馬に分布する。ヌイトはむしろ北部寄りに1地点ある。本地図の方が話者の年齢が若いことから、かつて南部にもあったヌイトスが北部にのみ残って消え、ヌイトに取って変わられ、さらにそれも共通語化したと考えられる。ヌイトという語形はLAJには1地点のみ、本地図でも地点数は多くない。これは伝統的にあった語形というより、例えば凧糸などに対して縫い物につかう「縫い糸」という区別のために発生したと推測されることから、本調査が誘導した際に出てきた語形であろう。

< 地図19「すりばち」 >

すりばちの「する」を忌避した語であるアタリバチが全域に広がっている。シラジの地点も多く、県東部の中でもより東寄り、岩槻市・菖蒲町以東に分布している。LAJでのシラジはごく東端に1地点しかない。アタリバチも県内北部に3地点あるのみである。大橋資料では県の東部だけでなく、西部にもシラジがある。シラジは群馬県・茨城県にも分布があり、埼玉はシラジの分布の南端になるとみてよいだろう。大橋資料のアタリバチの分布は東京にも広がり、埼玉がこのアタリバチとシラジの境界地帯に

なるようである。したがって本地図のような併用状態が生まれたのである。中年層では共通語化していずれの語形も消えかかり、スリコギバチが残っている。スリコギバチはLAJ、大橋資料ともに見られない語形であるが、スリコギ(棒)を使う鉢であるところから発想された語形であろう。

<地図20「ふすま」>

全域にカラカミが分布しフスマと併用されている。カラカミを単用する地点は9地点のみである。スマという語形も5地点にある。1地点あるオビドは本地図には対象にしていない県西部でよく聞かれる語形で、いわゆる紙を張った引き戸ではなく、板張りの引き戸を指す言葉である。LAJでは、やはりカラカミが分布する中にフスマが点在する。スマは三郷市の1地点だけである。関東全体としてみると、千葉県・茨城県側はフスマで、東京がカラカミである。埼玉県はその接触地帯になっている。中年層の多くの地点はフスマになり、伊勢崎線沿線に比較的カラカミが残っている。全国的にみると、「ふすま」の方言分布は、交互分布をしている。佐藤(1986)にはフスマが東北・関東・近畿・九州に分布しているが、カラカミの方が古く、近畿に新しく生まれたフスマが、そのもの自体の広まりとともに飛び火的变化をしたと解釈されている。

<地図21「庭」>

併用語形の多い項目である。庭と言っても色々あり、それぞれ使い分けられているようだが、本地図としては、とにかく庭を指す語形であればすべて採用したのでこのような地図になった。中心になる語形は、ウエキバとヤシキウチとツボニワの3つである。テーエンは方言というより「庭園」という共通語として「大きな屋敷の広い庭」を指すと認識されているようである。分布をみると、ウエキバは全体に分布している。ヤシキウチは南部に多く、北部、特に鷲宮町を中心とした北東部には聞かれない。ツボニワも北部には聞かれない。話者の説明によると、ウエキバとは庭の植木を植えてある部分を意味し、ヤシキウチは家の敷地全体を意味するという使い分けがあるという。ツボニワの説明は統一的ではない。ヤシキウチとい

うほど家の敷地が広くはないが、敷地の中の建物以外の部分を指す語として、ウエキバ・ヤシキウチに対応する語形であろうか。明確ではないが南北差のある項目といえる。LAJではツボニワが2地点ある。これは群馬県・栃木県・長野県・山梨県に分布する末端である。ウエキバとヤシキウチは1地点ずつ見られるが、まとまって分布しているところはない。本地図で埼玉東部ではかなりまとまって分布していることが明らかにできた。中年層では、この主要3語形がかなり衰退して共通語化し、方言形は東武線以東に残っている。

< 地図22「雷」 >

ライサマが全域を覆っている。LAJでみると、ライサマは埼玉から東北の太平洋側に広い分布を持っている語形である。埼玉はその南限である。大橋資料でも、県西部(秩父地方)以外にやはりライサマが分布している。本地図にはゴロゴロサマという語形も多く分布しているが、話者の報告によるとこれは幼児に向かって言う場合に使われる語形という。LAJでも県北部に2地点あり、やはり子供が使う語であるという。オヒカリスンという語形はLAJの凡例にないが、本地図では北東部に3地点ある。この3地点では次の「稲妻」の項目でオヒカリという語形を用いていない。中年層は共通語化があるものの、比較的ライサマが残っている。残っているのはやはり東武線以東に多い。

< 地図23「稲妻」 >

全域でイナピカリが分布し、杉戸町・上尾市以北ではオヒカリ・オシカリが分布してイナピカリと併用状態になっている。LAJでもイナピカリが優勢であるが、北部にオヒカリ・オヒカリサマという語形が5例ある。本地図でこの南北差がはっきり確認された。イナピカリは本地図では春日部に3地点、LAJには県中央に1地点だが、大橋資料では埼玉県のごく東端にあり、本地図と一致する。このイナピカリは大橋資料によると茨城県に広がる語形で、茨城県との連続性が考えられる。また大橋資料によるとオシカリが栃木県に多く分布し、同様に隣県との連続性が見られる。

< 地図24「(雷が)落ちる」>

サガルという語形が岩槻市・菖蒲町以東に分布する、県東部を代表する語形である。中年層では1地点以外は全地点共通語化してしまっている。L A Jでは県東部から中部にかけてサガルが分布している。このようにかつて県中部にもサガルがあったとしたら、中部では共通語化が早かったということになる。サガルは茨城県・栃木県・群馬県にも連続して分布している。大橋資料でも埼玉県中部から東部にオッコチルと併用でサガルが分布している。しかし県の北部にはない。本地図も、北端の羽生市・行田市に無いところが一致する。本地図のサガルは北の群馬県や栃木県との連続性を失い、東の茨城県と連続して分布を残していることになる。

< 地図25「つむじかぜ」>

軒先や広場の隅で風がぐるぐる回って吹くことを尋ねる項目であるが、タツマキという回答がある。北部にやや多いが、南部にもある。L A Jでも県中部寄りの8地点にやはりタツマキがある。それでは大きな災害をもたらすほどの「竜巻」と区別があるのかということが問題になる。本稿では地図化していないが「竜巻」も調査しているので、突き合わせてみると、「つむじかぜ」でタツマキという回答をした地点は、「竜巻」の項目でもほとんどが同じタツマキという語形を用いている。同音語を両方の意味に用いていて語形では区別していない。L A Jのタツマキの回答のうち5地点には「大きなもの」という注がついている。

L A Jにはトモジ(カゼ)という語形が県中部に見られるが、県東部にはなく、本地図でもやはりこの語形はない。

また、本地図にはウズマキカゼという語形がある。南部の方で多く聞かれる。タツマキと何とか区別しようとして作られた語形ではないか。L A Jにもウズ・ウズカゼ・ウズマキという語形があるが、各地に僅かずつ散見される程度である。一定の分布を持つ語ではなく、意味対象の形状から各地で自然発生した語形と考えられる。徳川編(1979)ではL A Jの「つむじ風」の解説をしている。そこでは、つむじ風自体の存非が語形を区別

するかどうかにかかわるとして、日本海側に無回答やタツマキという語形が多いことを説明している。埼玉県は逆に、つむじ風自体は日常いくらでも発生しているが特定の表現がない地域なのではないだろうか。むしろ、海に面していないので大型のタツマキの方を目にしないであろう。共通語のタツマキを渦状に吹く風全般に受け入れてしまったのではないか。したがってタツマキノチイサイノなどという語形も生まれている。

< 地図26「うるこ」 >

高年層、中年層の差が明瞭な項目である。中年層ではすっかり俚言形が共通語に取って代わられているが、高年層は伊勢崎線沿線に俚言形が残っている。北部はコケラが多く、南部の方がコケが多い。北部でも行田・川里にはコケがある。全体にコケ・コケラを併用回答する話者も多い。県庁所在地のさいたま市の方でまだ俚言形がみられるのに、県中央寄りの上尾市・菖蒲町・騎西町に俚言形が見られないのは不思議である。意外に早くに共通語化してしまったのだろうか。植物の「苔」と区別するために「サカナノ〜」をわざわざ付ける回答もある。LAJは本地図と同じくコケとコケラの併用状態で、どちらかというコケラの回答が多い。

< 地図27「おてだま」 >

東部の中でも北部と南部にきれいに分かれた分布を見せている。東武野田線以南はナッコ、それより北ではナンゴという。中年層では、これもきれいに共通語化されている。LAJでも同様に埼玉県の東部の南側にナッコ、北側にナンゴと分布が分かれている。県中部にはオテダマがオシト(おひとつの音訛とされる)があり、さらに西部にいくとまた東部の北側と同じくナンゴが使われている。柴田資料でも、さいたま市付近はやはりナッコである。柴田資料ではさらに西側、川越街道より西ではオシ(ー)トが分布する。ナンゴは見られない。大橋資料でも東部の南にナッコ、北にナンゴで本地図と合う。境界線も本図とほぼ同じ位置にある。ナンゴは群馬県・栃木県にもあり、また千葉県房総半島にもある。ナンゴのまとまった分布をナッコが分断しているところから、ナッコの方がナンゴより新しい

語形と推測される。

<地図28「おにごっこ」>

つぎの項目「かくれんぼ」との語形の使い分けが問題になる項目である。本地図は鬼がその他の子供を追いかける遊びで、次の「かくれんぼ」のように、鬼ではない子供が隠れるのを探し出す遊びではない。全域共通語と同じオニゴッコであるが、東部のなかでも東寄りの伊勢崎線沿いにカクレンボ・カクネンボが分布する。中年層ではむしろ県中央寄りにカクレンボが点在しているが、東寄りのカクレンボは中年層に継承されていない。中年層ではオイカケッコになっている。L A Jではオニゴッコが優勢で、カクネンボが1地点、オニゴトが1地点ある。逆に、本地図にあるオニヤンゴ・オニサンゴの語形はL A Jの凡例にはない。県全体をみると、埼玉県西部にはオニコがあり、これは長野や山梨県などの中部地方と分布が重なっている。柴田資料ではさいたま市周辺はやはりオニゴッコであり、荒川以西にオニッコが分布している。カクレンボやカクネンボという語形はない。

<地図29「かくれんぼ」>

この項目は鬼以外の子供がどこかに隠れる遊びだが、これをオニゴッコといい、前項目の「おにごっこ」と合わせてみると、共通語と逆の語形をとる地点があるのが特徴である。または両方をオニゴッコという地点もある。カクネゴッコは東武伊勢崎線沿線に多いが、さいたま市や上尾市にも1地点ずつ見られる。オニゴッコとカクネゴッコ両方を併用する地点もある。カクネゴッコとカクレゴッコ、すなわち、第3拍目が「ネ」のものは「オニゴッコ」を、第3拍目が「レ」のものは「かくれんぼ」を表すという使い分けが見られる地点もある。第3拍目が「レ」であることが意味を区別しているようである。L A Jでは、県東端にやはりカクネゴッコとカクネンボがあって本地図と符合する。本地図にない語形としては、県中部にカクネコ・カクレコ・カクネギンチョがある。大橋資料では県中部を中心にカクネッコが分布しているが、県東部には本地図とL A Jとは違って

カクネゴッコの類はあまりない。あるのはカクネゴトとカクネンゴトである。大橋資料でカクネゴッコが分布しているのは、千葉県の西部や茨城県の西部である。本地図のカクネゴッコはこの隣県から広がってきたものではないか。

佐藤（1991）では、日本全体の分布から見て、カクレゴという語形の方が古く、カクレンボという語形の方が新しいと解釈している。末尾が～コト（コ・ゴッコ）と～ボ（ボー）の新古関係がその通りであるとする、本地図で見ている埼玉県東部は、「かくれんぼ」の方に古い語形が、「おにごっこ」の方に新しい語形が採用されていると考えられる。かつての中央部である近畿地方からカクレンボという語形が関東に伝わって来たとき、その新しい語形は隠れる隠れないを区別せずに鬼役が他を捕まえる遊戯全体を指し示したのではないか。その後、元々あったオニゴト（オニゴッコ）が鬼役以外は隠れる遊びを特定して指すことばに意味領域を狭めたのではないだろうか。そして、前述したように、さらにその後、両者の区別をつけるために第3拍の音による区別へと進んだと推測される。

< 地図30「片足跳び」 >

はっきりとした南北差が認められる。春日部市を境とし、南部にアシケンケン、北部にアシコギが分布する。LAJでも同じように県東部の北にアシコギが見られるが、本地図よりもっと南まで広がっている。アシケンケンは、むしろ県東部のなかでもさらに東端にあり、茨城県・栃木県・千葉県のそれぞれ西部につながって分布が広がっている。南北差というより東西差に見える。ちなみに、LAJによると県の中部にピッコスル、西部にはセンギカクという語形がある。柴田資料をみると、岩槻市まではアシケンケンが見られるが、さいたま市付近を多く占める語形はアシコンコンである。さらに西にいくと「ア」がとれてシコンコンになる。大橋資料では、東部の北側にアシコギが分布し、東部の南側にはアシコンコンとアシケンケンが分布している。アシコンコンとアシケンケンは茨城県と栃木県に分布が広くつながっており、アシコギは栃木県南部に分布がつながって

いるほか、茨城県北部と栃木県北部にも分布がある。このことからアシコギの方が古く、アシケンケンはその後生まれた語形であろう。新たなアシケンケンは千葉県や栃木県側から埼玉東部に入ったと考えられる。県全体をみると、中部の南にシンコンコンがあり東京へと分布が続く。西部にはセンギがある。

本地図の中年層では、アシコギもアシケンケンも衰退し、共通語化が進んでいる。アシケンケンはカタアシケンケンと形を変えている。

4．埼玉県東部の分布特徴

4．1．高年層を中心にみた分布 - 南北差と東西差 -

大きく南北差のある語と、東西差のある語に分けられる。前者には「ものもらい」「くるぶし」「おたまじゃくし」「かまきり」「捨てる」「疲れた」「くすぐる」「稲妻」「おてだま」「片足跳び」があたる。このうち「おたまじゃくし」「捨てる」「疲れた」「稲妻」「おてだま」「片足跳び」は、語によって多少のずれはあるが、県東部のちょうど真ん中の春日部付近、東武野田線の付近に境界がある。県東部の南北差を代表する語である。「ものもらい」「くすぐる」は境界線が北寄りで、幸手市・騎西町・行田市に俚言形が分布する。「かまきり」はごく南東部でゴンベーが分布している。

埼玉県東部の近世の領を重田（前掲）に掲載されている図で改めて見ると、多くの領が南北に長い形をしている。本地図で見られた南北境界と重なる境界を持つ領はない。南北境界の一つの目安になる東武野田線は、松伏領・南部領・新方領・岩槻領を横断している。河川や水路も前述のとおり南北に走る。しかしこのように野田線付近に境界があるというのは、これらの所領の境界が言語領域を形成するような強いものではなかったことを示している。

一方、県東部の中で東西差の見られる語には「まゆげ」「四角い」「しおからい」「正座する」「おんぶする」「すりばち」「(雷が)落ちる」「おにごっこ」が挙げられる。典型的な東西差の境界は川口市～羽生市を結ぶ線で

あり、わかりやすく言えば東側は東武伊勢崎線沿線周囲である。

「しおからい」「おんぶする」は東側でももっと東寄りに東西の境界がある。「しおからい」は北川辺町や大利根町、また庄和町・吉川町・三郷市などのごく東北部にカライやシオカライという俚言形がない。中年層でも千葉県寄りには方言形がない。「おんぶする」は中年層にやはりごく東部には俚言形がない。これらの地域は埼玉県方言に属するというより、東に接している茨城県や千葉県との繋がりの方が強いと考えられる。

「かくれんぼ」は積極的な東西分布を取り出しにくい、北部西側の騎西町や鴻巣市で方言形が少ないという特徴がある。

4.2. その他の分布

4.1で触れなかった項目の地図についてみる。

「くるぶし」「うろこ」は南北差と東西差の両方が見られる。「くるぶし」は、まず南北差が見られる。南部では方言語形の種類が多く、特にコブシがある点の特徴である。南部では東西差はないが、北部では西側にはクロブシやクロボシが分布しているのに、東側に俚言形が非常に少ないという東西差がある。「うろこ」は東側でコケラがよく使われているが、南部ではコケも併用されている。

「雷」は中年層が武蔵野線以南ですっかり共通語化している。「ふすま」は中年層で東武伊勢崎線沿線の東側で方言が残るのに県中部寄りの西側で共通語化している。高年層では分布差がなくても共通語化の進行に地域差があぶり出されているといえよう。

「糸」はごく北東部にヌイトスがある。俚言形のヌイトはやや南に多いが、そもそも地点数が少なく分布の偏りがあると認められない。「においをかぐ」もニオイカクが南部に多いが北部に全く聞かれないわけではない。

「つむじかぜ」は北部にタツマキを用いる地点が固まっているのが目立つが、南部でもタツマキを使う地点があり明瞭な分布境界はない。「とかげ」は比較的北部にカナヘビ類が見られるが、境界線が上記の南北差のある語に比べるとずっと南に降りており、武蔵野線より北という分布になっている。

「あぐらをかく」「(塩味が)うすい」「庭」は語形に分布境界が見い出せないが、中年層の共通語化に東西差があり、東武伊勢崎線沿線以東に方言形が残っている。

「すっぱい」は全く境界が見いだせない。ただ、北部の加須市・騎西町・川里村などで俚言形が聞かれない。

4.3. 高年層と若年層の比較

高年層と中年層を比較すると、いくつかの類型が見られる。まず、高年層では見られた方言語形が中年層で共通語化によって見られなくなる事例である。項目は「くるぶし」「まゆげ」「正座する」「くすぐる」「においをかぐ」「すりばち」「稲妻」「(雷が)落ちる」「うろこ」「おてだま」「かくれんぼ」「片足跳び」である。共通語形の記号を線記号または小記号で表しているため、地図上の見た目が高年層より中年層の方が全体に白っぽく見えるようになっている。

次に中年層にも方言語形が比較的残っているが、共通語化も進んでいる事例である。項目は「おたまじゃくし」「とかげ」「四角い」「(塩味が)うすい」「おんぶする」「ふすま」「庭」である。「おたまじゃくし」は南部にオタマが残っているがオタマッコは消えている。「とかげ」はカナヘビが比較的残っているのに、カマゲツチョやカガメツチョが消えている。「四角い」はシカクナはほとんど消えているが、チョーホーケーナ・ナガシカクナが残っている。「(塩味が)うすい」「ふすま」は東武伊勢崎線沿線に方言語形が残っている。「おんぶする」はブーやプツアス等の語形が消えているが、オブーから転じたと考えられるオブルという新しい語形が中年層に広まっている。「庭」は凡例が多い項目だが、これは各地図の解説の項目でも述べたように、同じ庭でも指すものが異なるためであると考えられる。中年層を見ると大きな屋敷の広々とした庭の意味での「テーエン」を除けば、方言語形が使われているのは東武線沿線に偏り、ウエキバ・ツボニワ・ヤシキウチが少しずつ残っている。

高年層でも方言語形が少ない項目は世代差が目立たない。「ものもらい」

「かまきり」「あぐらをかく」「糸」「つむじかぜ」「おにごっこ」がそれにあたる。このうち「ものもらい」と「かまきり」はもともと共通語と同じ語形を使う地点が圧倒的に多く一見世代差がないように見えるが、俚言形メケゴ、ゴンペーを使う地域ではやはり中年層で共通語化している。「あぐらをかく」は高年層では少なかったアグラ（オ）クムが東武線沿線の中年層によく聞かれるようになっている。アグロは方言形だと認識して使わなくなったが、クムという動詞部分は実際に足を組んでいるのだから非共通語とは考えなかったためだろう。したがって東京に近い地点でも残っている。「つむじかぜ」のタツマキという語は、高年層と中年層で分布領域が異なる。中年層のタツマキの使用は、共通語の「竜巻」から得た語形を、つむじ風の意味に転用したもので、共通語化してはいないが、共通語による影響と考える。

世代の差があまりないものは、「しおからい」「すっぱい」「疲れた」「捨てる」「雷」である。「しおからい」「疲れた」「捨てる」はどちらの世代も併用語形が多いのが特徴である。特に南部では併用が多い。共通語と同じ語形を用いながらそれぞれ、カライとシオカライ、ケツタルイ・カツタルイ・ダルイ、ウッチャル・ホッポルを用いている。これらの語形を、話者は東京でも使える俗語として認識していると推測される。実際に東京語の方言を東京都教育委員会編（1986）『東京都言語地図』で確認すると、「しおからい」はカライもシオッカライも使っている。しかし「疲れた」は埼玉の東部が接する足立区周辺では本地図の語形は使っていない。「捨てる」の図は無かった。「すっぱい」は語末の連母音が融合したショッパーを中年層があまり使わないという程度の差しかない。「雷」は埼玉以外にも分布の広いライサマの語形が中年層でもよく見られる。しかし、武蔵野線以南だけはきれいに共通語化している。ライサマの回答もよく見ると中年層でやや少なくなっている。

以上のように、程度の差はあるが、世代差が全く見られないという項目はほとんどない。

4.3. 隣接県との関係

本稿の調査地域は、群馬・栃木・茨城・千葉・東京の各都県に接している。LAJや大橋資料や柴田資料と比較すると、当然それらの地域と連続する分布が見いだせた。

北部の群馬県や栃木県と連続性が見られたのは「ものもらい」のメカイゴ、「まゆげ」のマミゲ、「糸」のヌイトス、「稲妻」のオシカリ、がある。群馬県と連続性がある語は埼玉県の中にもその語形がある。本調査地点の県中部寄りには群馬との繋がりが強い。「すりばち」のシラジは群馬県と茨城県にまたがる分布領域につながっている。

東北部に接する茨城県と連続性のあるものには、「においをかく」の助詞「を」を発音しないニオイカク、「稲妻」のイナピカリ、「(雷が)落ちる」のサガル、「かくれんぼ」のカクネゴッコがある。「おんぶする」にオブルが分布しない点も共通している。

南接する東京から連続する分布もある。「とかげ」のカガミツチョ、「すりばち」のアタリバチ、「ふすま」のカラカミがある。

また、関東域に大きな分布領域をなす一部となっているのは「オタマジヤクシ」のオタマ、「庭」のツボニワ、「おてだま」のナンゴ、「片足跳び」のアシコギやアシケンケンがある。

こうしてみると、三方を他県と接触している埼玉県東部は、それぞれ隣接地域と少しずつ分布がつながっており、埼玉県という明確な境界をとりたてて持っていないことがわかる。大橋資料の図154・157などの語彙面からみた関東地方域の方言分派図でも、埼玉東部は、県中部・県西部と異なり、どちらかという栃木県や茨城県、まれには千葉県との分布のつながりがあると見ているようである。アツラモンダ（もったいない）やシモツカレ（初午の時に作る料理）がその例として挙げられている。

5. まとめ

以上、埼玉県東部の方言分布地図を見てきたが、区画論的にみると、埼

玉県には東部とそれ以外（中部・西部）とに分ける境界、またその東部を分割する南北の境界が見えてきた。東部を分ける境界はおおよそ川口市と羽生市を結ぶ線にあり、南北を分ける境界は春日部市・上尾市を結ぶ線にある。東部をそれ以西と分ける地域は自然地形的障害はない農村地帯である。ある意味では、このような自然地形境界がない、政治的境界も強くないということが、逆に方言の活発な行き来を阻んで、語の接触や衝突などを起こしてこなかったために境界ができたのかもしれない。確かに、人の往来は南北に走る街道や路線によってあるものの、その利用者は江戸・東京とさらに北の地域とを行き来する人たちであり、土地の人たち自身はその交通路を利用して行き来をしてはいないということではないか。つまり地元周辺からあまり出入りしていないということである。しかし、東部は頑なな独立した領域ではなく、群馬・栃木・茨城の諸県と方言分布領域がつながっていることも多い。それでも、埼玉県東部は日光街道を中心に一つの領域を形作っていた。それは現在の東武伊勢崎線沿線に一定の方言語形領域が形成されている項目が多いことから伺える。しかし、南北を分ける線にはその根拠が見いだせない。自然地形も政治的境界もない。確定的な根拠ではないが、日光街道をたどって江戸を出発した旅人が最初の宿を取るとされた粕壁宿と次の杉戸宿の間には街のにぎわいの違いがあって、より粕壁の方に人口が集中して南北境界の南側の北端となったのかもしれない。そう考えられるほど南北差がはっきりと見受けられた。

さいたま市を中心とする県中央部で進む共通語化が東部に浸食しているという様子は、本調査の世代ではまだない。共通語化は東部では南接する東京から直接進行してきていると考えられる。本地図からは、柴田資料のいう南から北へ向かう「ことばの流れ」は世代差を見てもあまりはっきりとは見えなかった。柴田資料の扱った県中央部と異なり、本稿で扱った県東部では、南からの積極的な共通語化はそれほどまだ強くないようである。しかし、本調査の中年層ではすでに誘導しないと方言語形が現れないことも多く、この世代以下では大きく共通語化が進行しているであろう。

注

1. 調査地点は東武線やJR線の各駅周辺をできるだけ調査している。調査の開始当初、グロットグラムを作ることを目的としていたためである。調査地点のうち、駅周辺地域として選んだ地点は地図上で線路の上に記号をプロットしている。駅名と地点の関係が分かるように本稿末に掲げる。
2. 筆者の単独調査もあるが、調査のほとんどは筆者の行う授業「卒業研究」(3年)・「日本語学演習」(2年)の履修者による共同調査のフィールドワーク実習という形で行った。調査員となった文教大学文学部の47人の学生氏名を本稿末に掲げる。
3. 地図化しなかった項目は語彙で「みずおち」「おうま」「めうま」「こうま」「おおきい」「黄色い」「コワイを疲れたの意味で使うか」「驚く」「いびきをかく」「竜巻」、文法で「～ヤラ～ヤラ(並列の副助詞)」「～ワ(副助詞)」である。
4. http://www2.kokken.go.jp/hogen/dp/gaj_dp_i/gaj_lms.htm

参考文献

- 井上史雄(1984)「7 埼玉県の方言」『講座方言学5 - 関東地方の方言 -』国書刊行会
- 井上史雄・加藤正信・高田眞・徳川宗賢(1971)「第2章利根川流域の言語 第3節 利根川流域の語の分布」『利根川 - 自然・文化・社会 -』九学会連合利根川流域調査委員会 弘文社
- 老川慶喜(1993)「第3章第3節 近代交通機関の整備と舟運の衰退」『中川水系 人文』(中川水系総合調査報告書2)
- 大西拓一(2002)「言語地図作成の電算化 - 『方言文法全国地図』第五集を例に - 」『日本語学』21-11
- 大橋勝男(1974・1976)『関東地方方言事象分布地図』第二巻・第三巻(桜楓社)
- 大橋勝男(1990・1991)『関東地方の方言についての方言地理学的研究』第二巻・第三巻(桜楓社)
- 大橋勝男・飯豊喜一(1971)「第2章利根川流域の言語 第2節利根川流域の方言の文法」『利根川 - 自然・文化・社会 -』九学会連合利根川流域調査委員会 弘文社
- 荻野綱男(1993)「第5節 流域の方言」『中川水系 人文』(中川水系総合調査報告書2)
- 国立国語研究所(1966-1975)『日本言語地図』第1～6集(国立国語研究所報告30(1)-30(6))大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』第1～6集(国立国語研究所報告97-1,2,3,4,5,6)大蔵省印刷局(第1～4集)財務省印刷局(第5集)国立印刷局(第6集)
- 佐藤亮一(1986)「7 方言の語彙 - 全国分布の類型とその成因 - 」『講座方言学1 方言概説』国書刊行会
- 佐藤亮一編(1991)『方言の読本』小学館

重田正夫(1993)「第2章第1節 流域の行政基盤」『中川水系 人文』(中川水系総合調査報告書2)

柴田武(1984)「埼玉県南部・東京都北部の方言分布(1)」『人口急増地帯としての埼玉県における言語接触とその問題点に関する総合的研究 昭和58年度文部省科学研究費補助金による県境成果報告』

東京外国語大学日本語ゼミナール(1978)『秩父地方方言地図』

東京都教育委員会編(1986)『東京都言語地図』

徳川宗賢編(1979)『日本の方言地図』中公新書

《調査項目》

語彙項目

ものもらい,くるぶし,みずおち,まゆげ,おたまじゃくし,かまきり,とかげ,おうま,めうま,こうま,おおきい,四角い(箱),黄色い,しおからい,すっぱい,(塩味が)うすい,疲れた,コワイを疲れたの意味で使うか,正座する,あくらをかく,捨てる,(幼児を)おんぶする,驚く,くすぐる,においをかく,糸,いびきをかく,すりばち,ふすま,庭,雷,稲妻,(雷が)落ちる,竜巻,つむじかぜ,うろこ,おてだま,おにごっこ,かくれんぼ,片足跳び

文法項目

着ることができる(能力可能),着られない(不可能),行った(回想),しよう(意志),書くだらう(推量・五段接続),来るだらう(推量・カ変接続),するだらう(推量・サ変接続),来られる(受身・迷惑),来ない(否定形),蹴れ(命令形),来い(命令形),任せた(使役形),呉れ(命令形),来れば(仮定形・力行変格活用),行かなければ(仮定形・打消し),起きれば(仮定形・一段活用),高ければ(仮定法・形容詞活用),~ノ(所有を表す格助詞),~ニ(対象を表す格助詞),~ダケ(限定の副助詞),~ヤラ~ヤラ(並列の副助詞),~ワ(副助詞),~ノ(ㄷ)(準体助詞),

《高年層調査地点》(75地点。名称は2001年時点。括弧内はプロットした駅名)

草加市谷塚町(谷塚駅),草加市高砂(草加駅),草加市中根(松原団地駅),草加市金明町(新田駅),越谷市南越谷(新越谷駅),越谷市弥生町(越谷駅),越谷市北越谷(北越谷駅),越谷市袋山(大袋駅),越谷市千間台(せんげん台駅),春日部市大場(武里駅),春日部市一ノ割(一ノ割駅),春日部市粕壁(春日部駅),宮代町川端(姫宮駅),宮代町百聞(東武動物公園駅),宮代町和戸(和戸駅),久喜中央(久喜駅),鷲宮町中央(鷲宮駅),加須市花崎(花崎駅),加須中央(加須駅),羽生市神戸(南羽生駅),羽生市南(羽生駅),八潮市鶴ヶ首根,三郷市高洲,三郷市半田(新三郷駅),草加市青柳,越谷市相模町,吉川市木売(吉川駅),吉川市加藤,吉川市上笹塚,松伏町松伏,春日部市牛島(藤の牛島駅),庄和町神間,庄和町赤崎,幸手市中(幸手駅),幸手市惣新田,栗橋町中里(南栗橋駅),大利根町北平野,鷲宮町東大輪(東鷲宮駅),鳩ヶ谷市本町,川口市本町(川口駅),川口市東本郷,川口市東川口(東川

埼玉県東部地方の方言分布と世代差(1)

口駅),岩槻市本町(岩槻駅),岩槻市笹久保,蓮田市上平野,春日部市上蛭田(豊春駅),さいたま市緑区井沼方(東浦和駅),さいたま市緑区三室,白岡町小久喜(白岡駅),菫蒲町下栢間,菫蒲町三箇,騎西町鴻荳,騎西町上崎,川里町広田,加須市大越,羽生市弥勒,北川辺町小野袋(柳生駅),蕨市中央(蕨駅),戸田市上戸田(戸田駅),さいたま市大宮区仲町(大宮駅),さいたま市浦和区岸町(浦和駅),さいたま市桜区田島(西浦和駅),さいたま市西区三条町,上尾市本町(上尾駅),上尾市平方,桶川市寿(桶川駅),桶川市川田谷,北本市北本(北本駅),北本市荒井,鴻巣市箕田(北鴻巣駅),鴻巣市本町(鴻巣駅),行田市忍(行田市駅),行田市荒木(武州荒木駅),行田市埼玉,行田市南河原,

《中年層調査地点》(64地点。名称は2001年時点。括弧内はプロットした駅名)
草加市谷塚町(谷塚駅),草加市高砂(草加駅),草加市中根(松原団地駅),草加市金明町(新田駅),越谷市蒲生寿町(蒲生駅),越谷市南越谷(新越谷駅),越谷市北越谷(北越谷駅),越谷市袋山(大袋駅),越谷市千間台(せんげん台駅),春日部市大場(武里駅),春日部粕壁(春日部駅),宮代町百聞(東武動物公園駅),宮代町和戸(和戸駅),久喜中央(久喜駅),鷲宮町中央(鷲宮駅),鷲宮町東大輪(東鷲宮駅),加須市花崎(花崎駅),加須市中央(加須駅),羽生市神戸(南羽生駅),羽生市南(羽生駅),八潮市八潮,草加市青柳,越谷市相模町,吉川市上笹塚,松伏町大川戸,春日部市牛島(藤の牛島駅),庄和町米島(南桜井駅),庄和町神間,庄和町赤崎,幸手市東(幸手駅),幸手市惣新田,栗橋町中里(南栗橋駅),大利根町北平野,鳩ヶ谷市坂下町,川口市金山町(川口駅),岩槻市本町(岩槻駅),岩槻市笹久保,春日部市上蛭田(豊春駅),蓮田市御前橋(蓮田駅),白岡町白岡(白岡駅),伊奈町小室(志久駅),伊奈町小針新宿(内宿駅),菫蒲町小林,菫蒲町菫蒲,騎西町鴻荳,騎西町上崎,羽生市弥勒,北川辺町向古河(新古河駅),蕨市中央(蕨駅),戸田市上戸田(戸田駅),さいたま市大宮区仲町(大宮駅),さいたま市桜区田島(西浦和駅),上尾市本町(上尾駅),上尾市平方,桶川市末広(桶川駅),桶川市川田谷,北本市北本(北本駅),北本市荒井,鴻巣市中井(北鴻巣駅),鴻巣市本町(鴻巣駅),行田市本丸(行田市駅),行田市荒木(武州荒木駅),行田市埼玉,行田市南河原,

《調査員》(五十音順)

有澤千鶴,石津悠子,伊東康恵,伊藤良,稲葉有紀恵,犬飼菜都美,弥富裕美子,江口麻衣子,海老澤春奈,遠藤綾子,大井祐美,大井祐美,大里晃子,太田沙織,岡崎由里子,岡田美和,奥村隆洋,長田拓也,金澤真紀,川上京太,川上仁,川端理恵,菊地翔,木許香織,小池美波,酒井寛子,佐々木綾乃,佐藤亜純,佐藤実紀,澤田創,塩崎隆洋,瀬川美砂,立谷真実,中沢和徳,中村真由美,中山貴之,波照間祥子,林芽衣子,平田竜太,堀泰浩,堀内理絵,前山知穂,増淵麻利子,松本明子,森川貴道,横田衣未,鷲田恵里,

付記 個人情報保護のためお名前を掲載出来ませんが、調査にご協力くださった教育委員会・公民館・自治会の方々、そして話者の方々に御礼申し上げます。

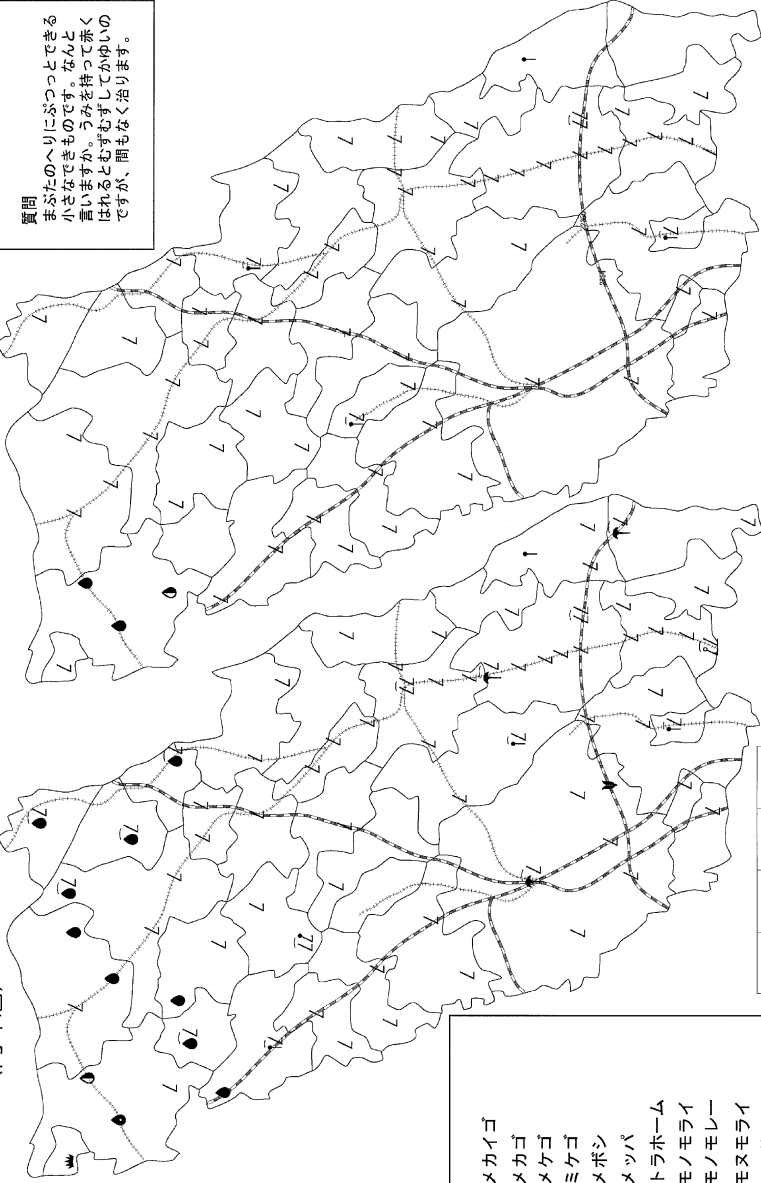
埼玉県東部言語地図

〈中年層〉

〈老年層〉

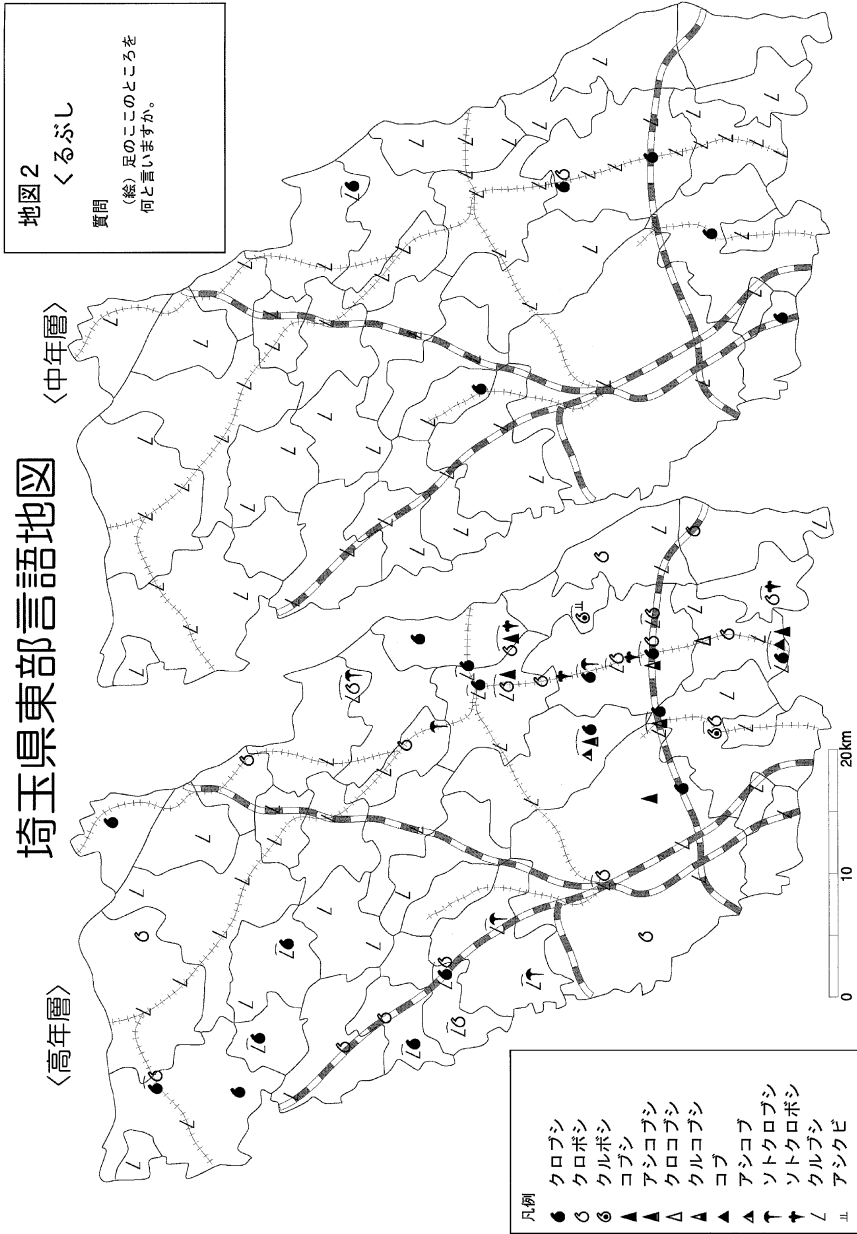
地図1
ものもらい

質問
まぶたのへりにぶつつとできる
小さなものです。なんと
言いますか。うみを持って赤く
はれるとむずむずしてかゆいの
ですが、間もなく治ります。

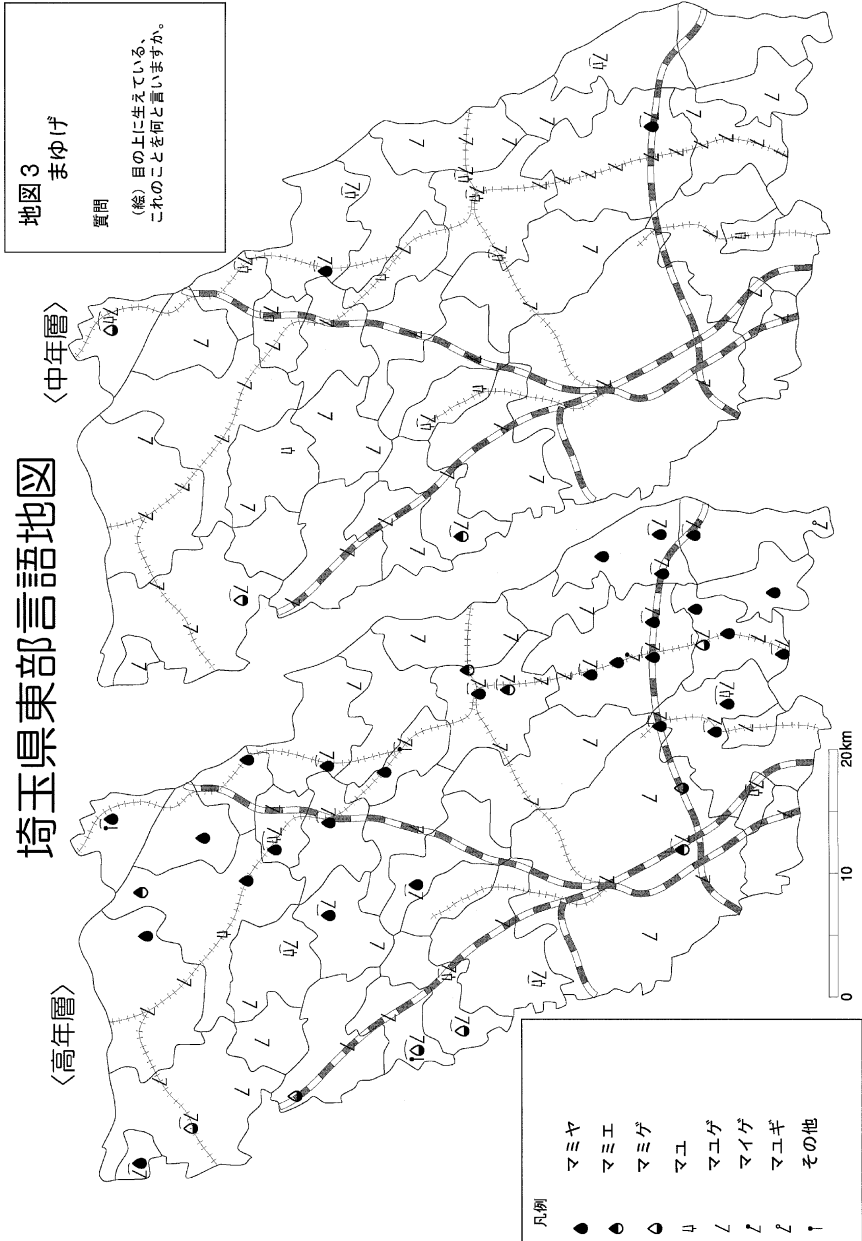


- 凡例
- メカイゴ
 - メカゴ
 - メケゴ
 - ミケゴ
 - ▼ メボシ
 - ☩ メツバ
 - ↑ トラホーム
 - ∟ モノモライ
 - ∟ モノモレ
 - ∟ モヌモライ
 - ∟ その他
 - ↑

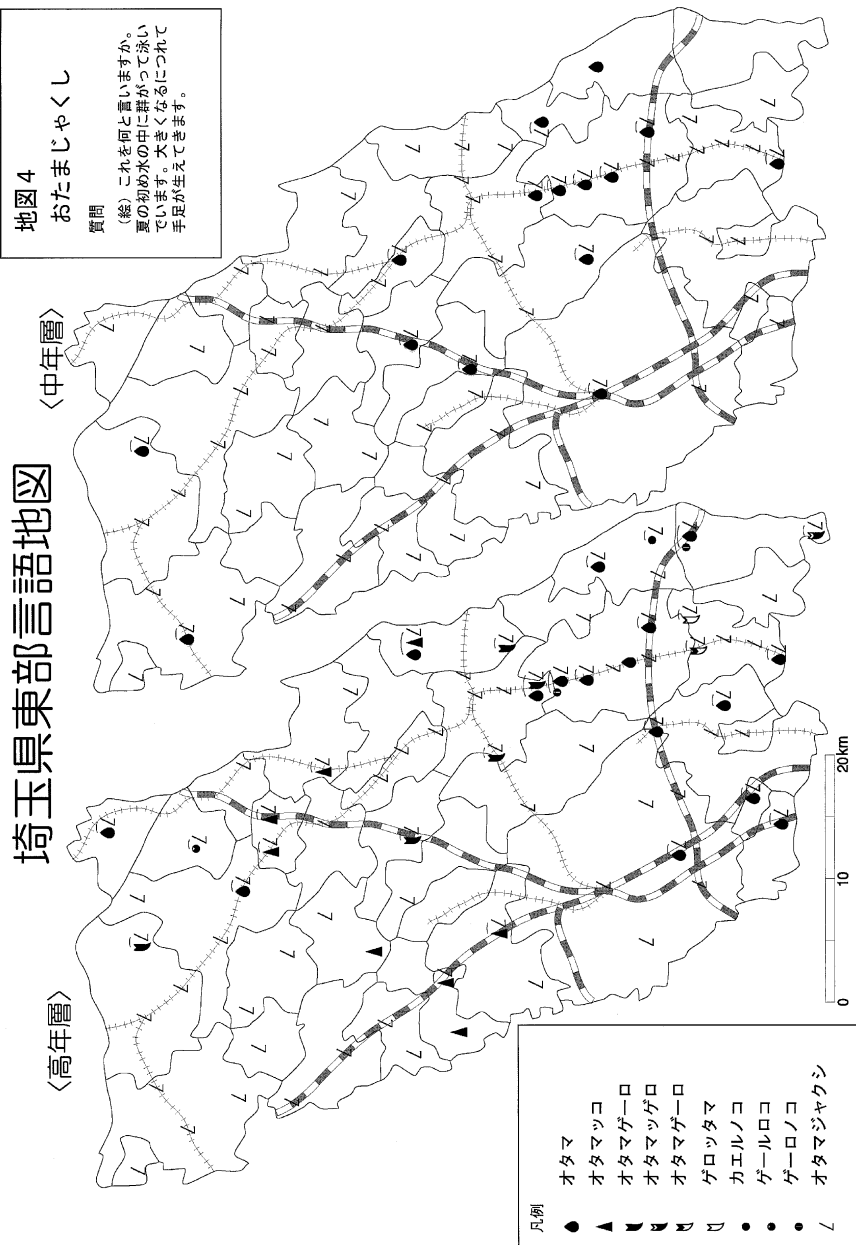
埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図



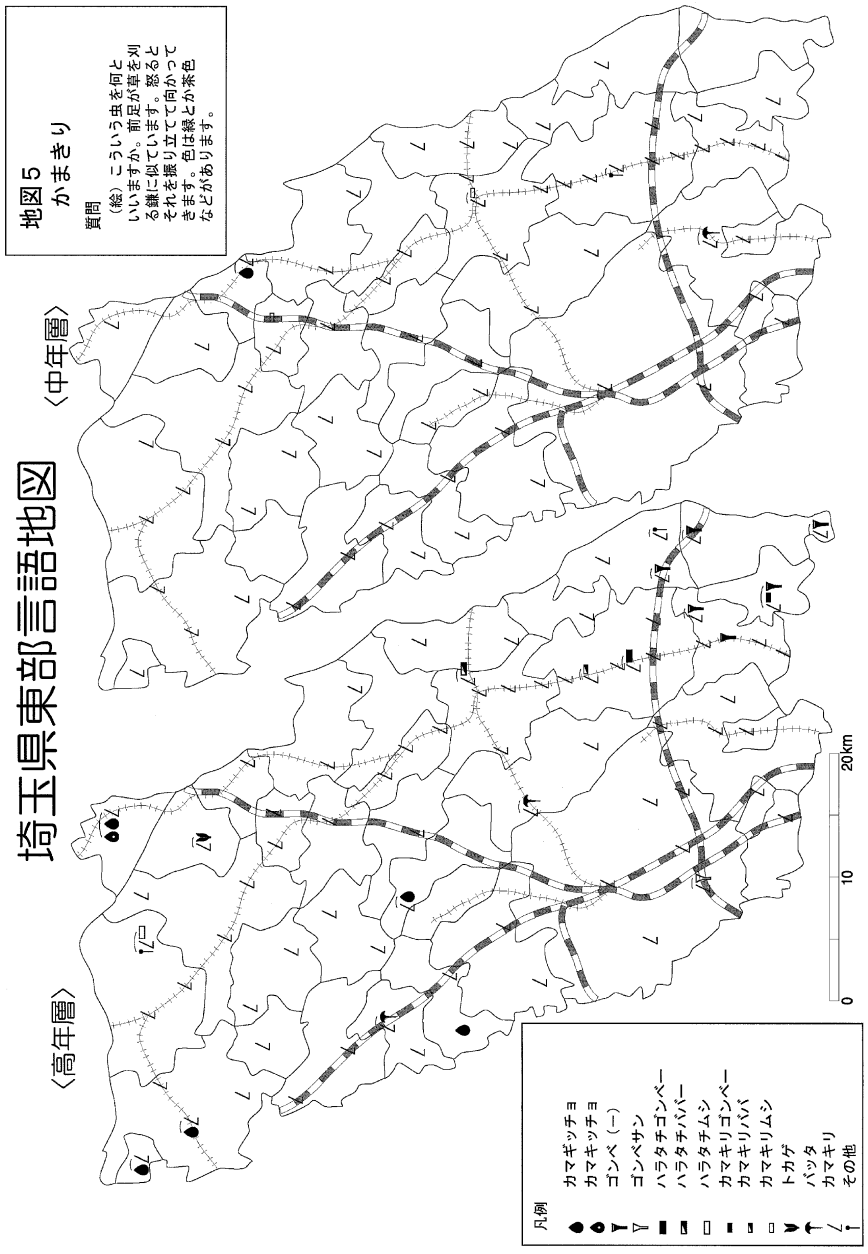
埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図

〈中年層〉

〈高年層〉



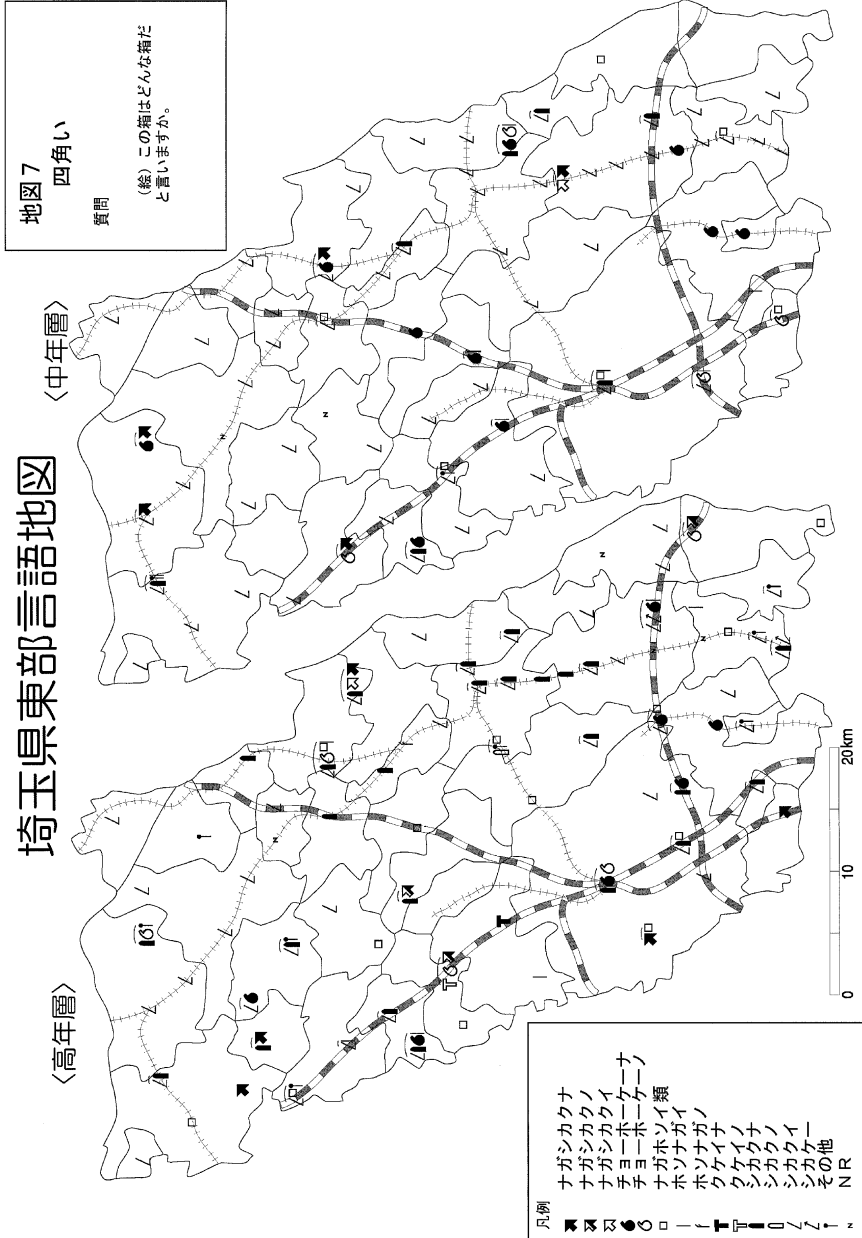
地図5
かまきり

質問
(絵) こういう由を何と
いいですか。前足が筆を引
る跡に似ています。恐ると
それを振り立てて向かって
きます。色は緑とか茶色
などがあります。

埼玉県東部言語地図

〈高年層〉

〈中年層〉



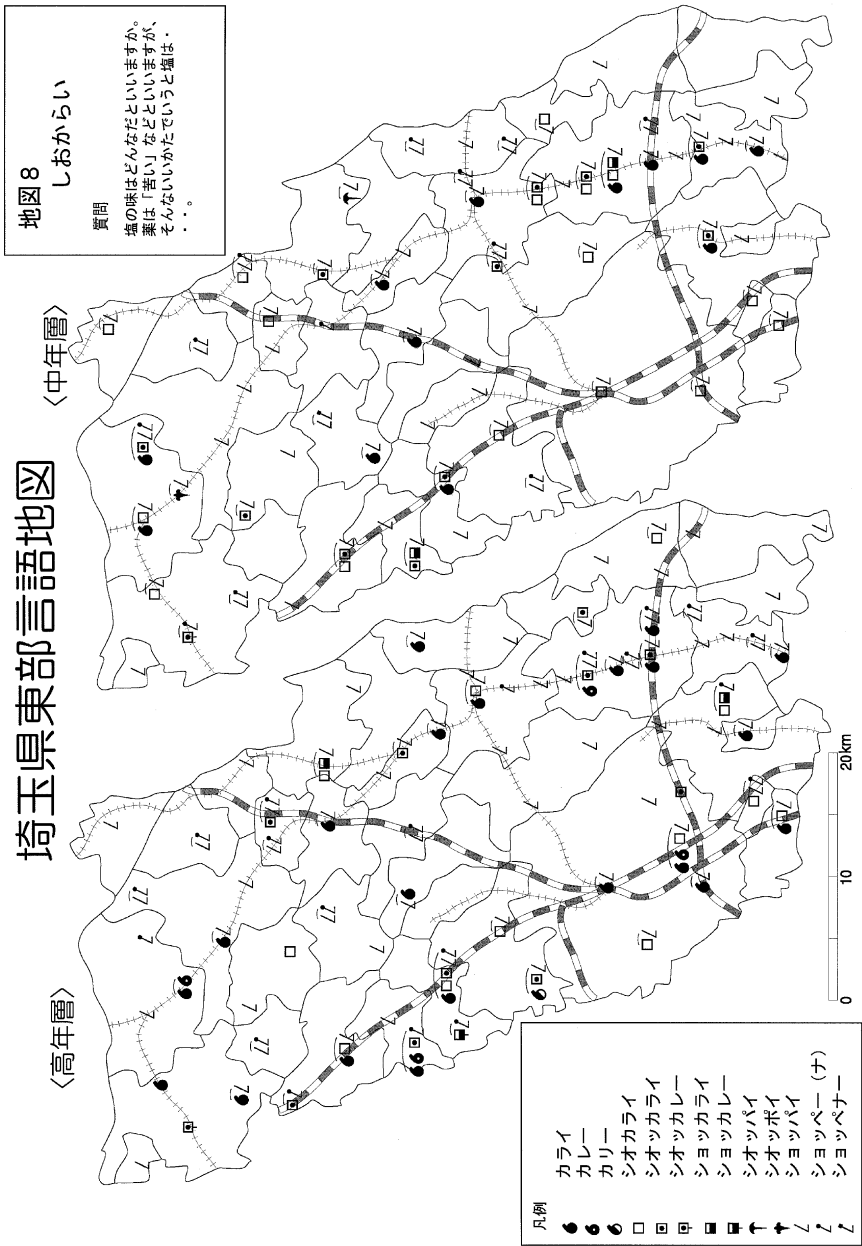
地図7
四角い
質問
(絵) この標はどんな箱だと書いますか。

- 凡例
- ナガシカクナ
 - ナガシカクノ
 - ナガシカクイ
 - ナチヨ一ホ一ケ一ナ
 - チチヨ一ホ一ケ一ノ
 - ナソチガイ
 - ホソチガイ
 - ホソチガノ
 - クケイノ
 - クケイナ
 - シカクノ
 - シカクイ
 - シカケ一
 - その他
 - NR

埼玉県東部言語地図

〈中年層〉

〈老年層〉

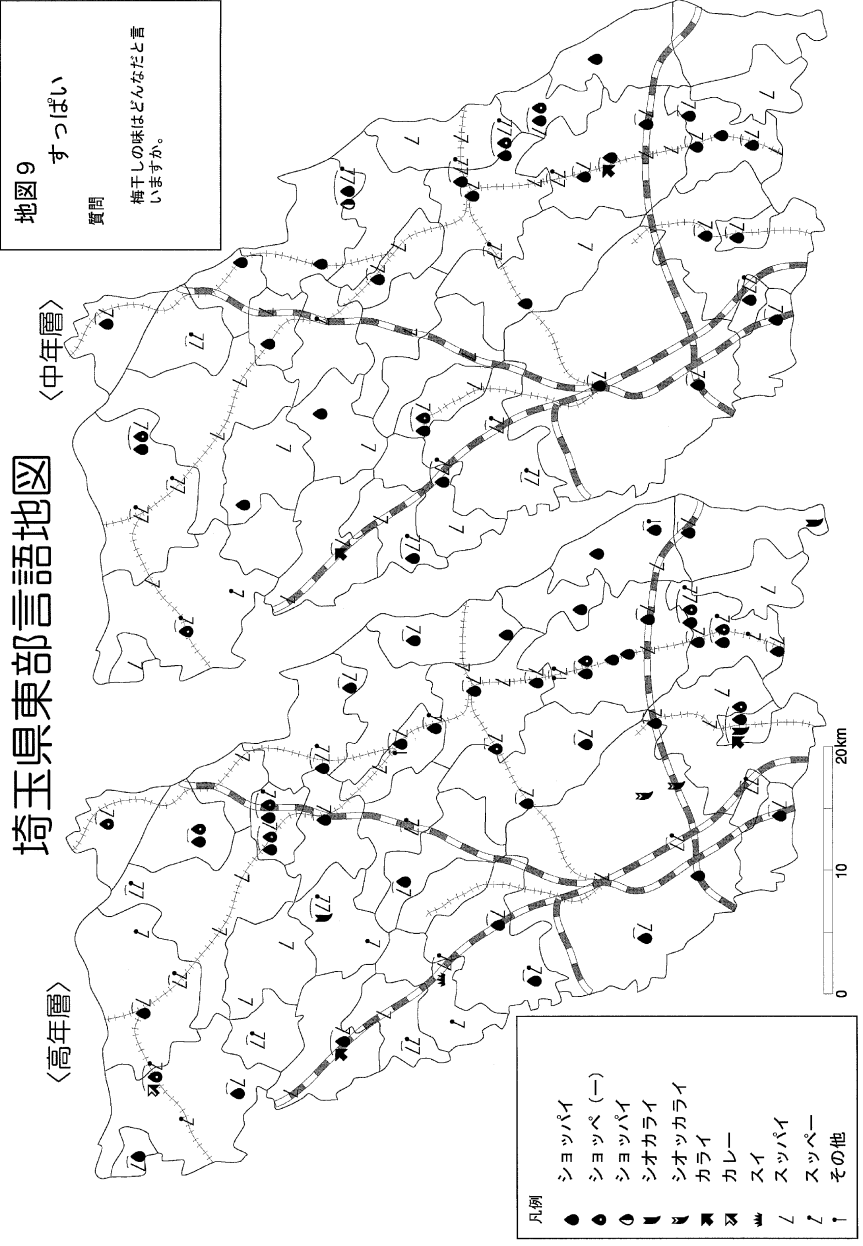


地図8
しおからい

質問
梅の味はどんなだといいますが、
葉は「苦い」などといいますが、
そんないかたでいうと種は・
・・・。

- 凡例
- カライ
 - カレー
 - ショカライ
 - ショッカライ
 - ショツカライ
 - ショツカレー
 - ショツバイ
 - ショツバイ
 - ショツペー(ナ)
 - ショツペナー

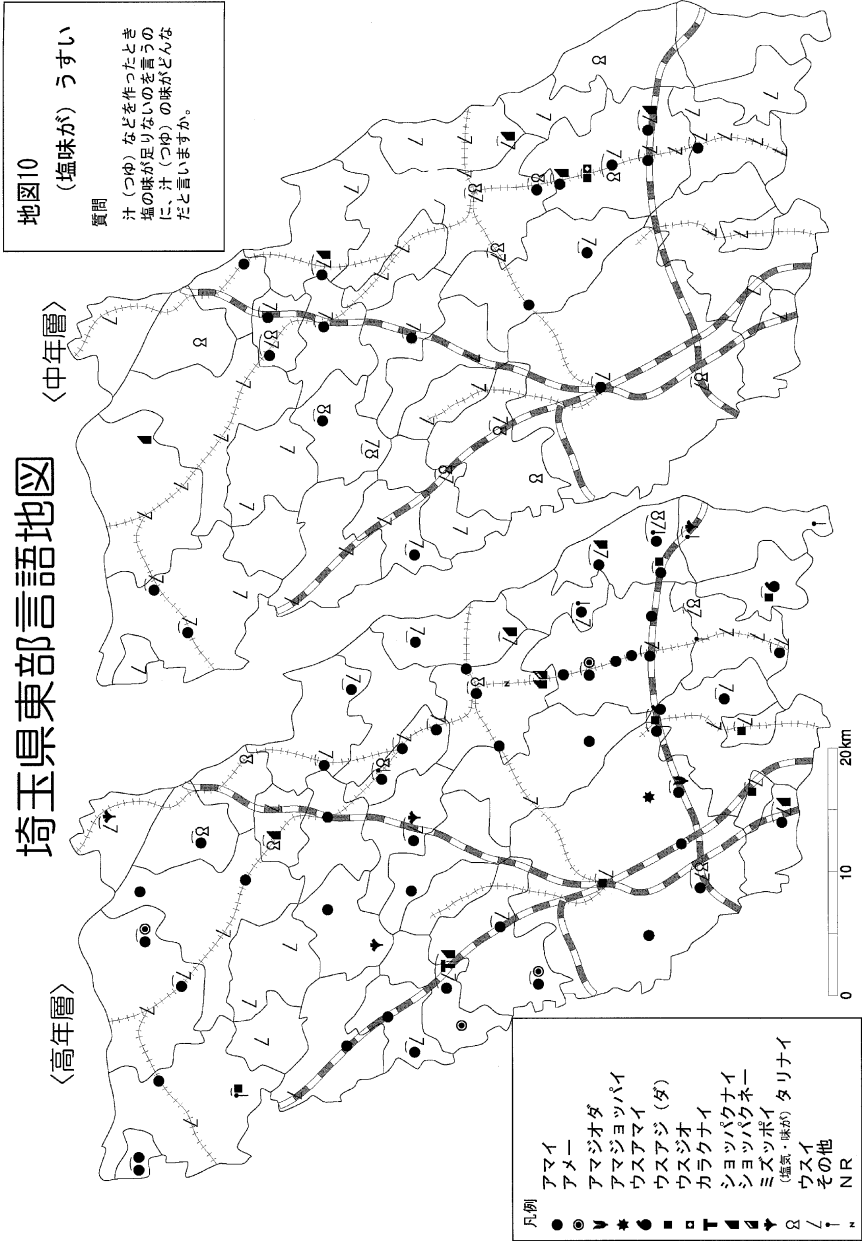
埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図

〈高年層〉

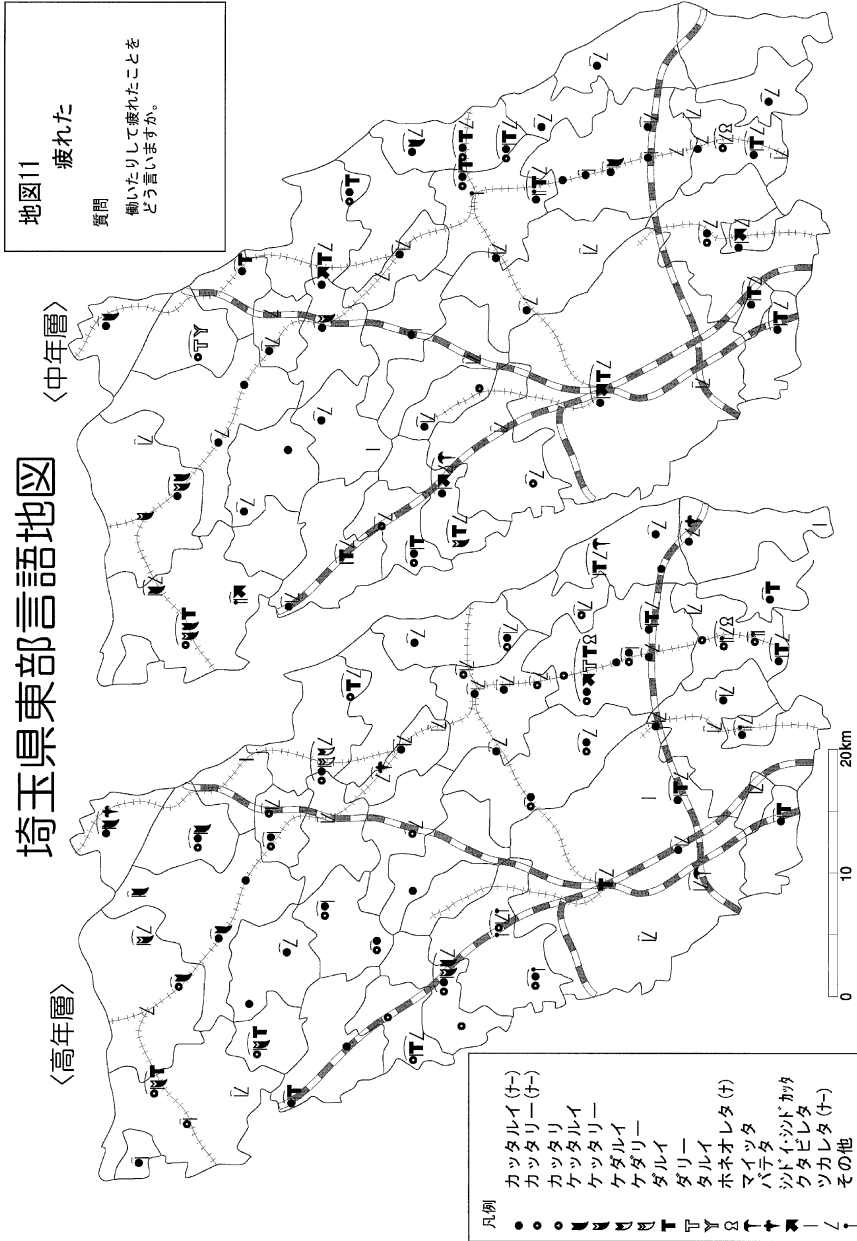
〈中年層〉



埼玉県東部言語地図

〈高年層〉

〈中年層〉



地図11

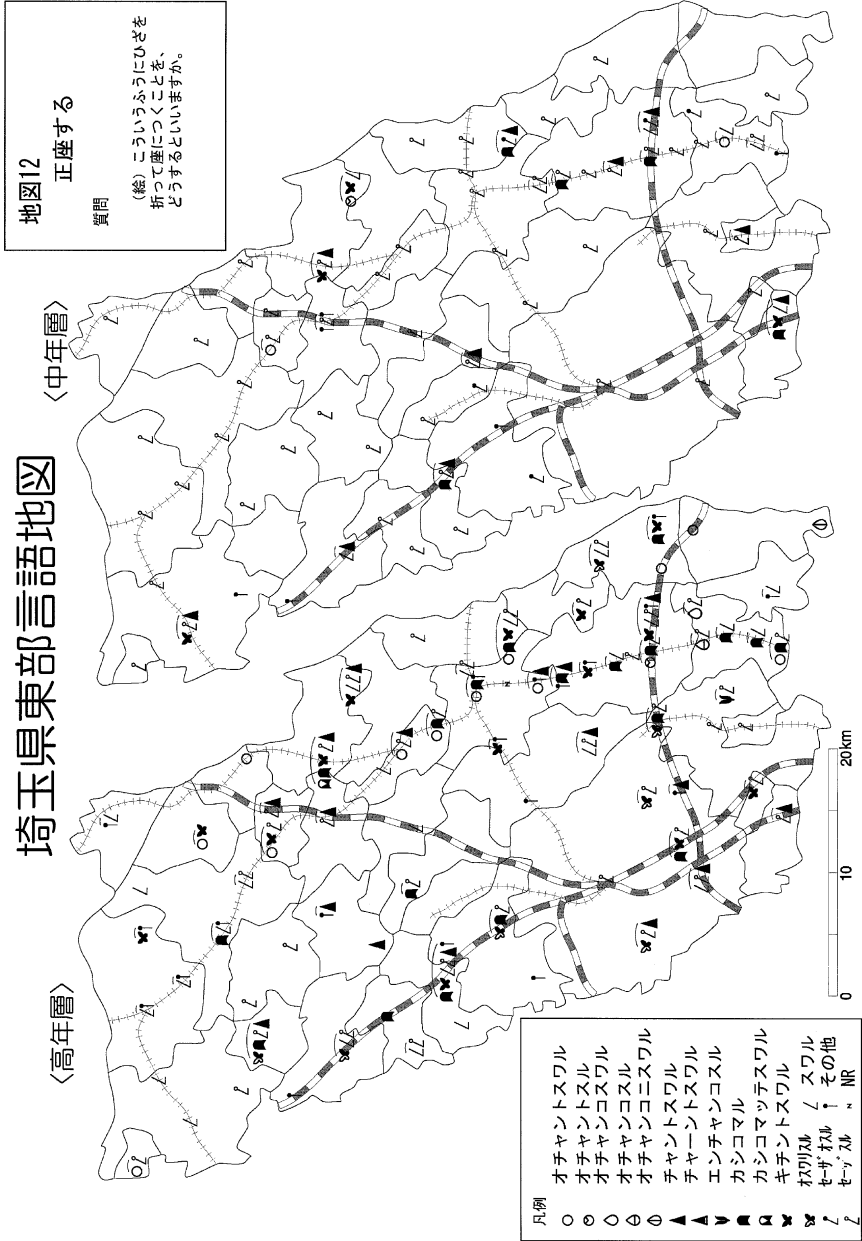
疲れた

質問

働いたりして疲れたことを
どう言いますが。

- 凡例
- カッタライ (+)
 - カッタリ (-)
 - カッタリ
 - ケッタライ
 - ケッタリ
 - ケダライ
 - ケダリ
 - ダライ
 - ダリ
 - ダリ
 - ホネオレタ (+)
 - マイツタ
 - パツタ
 - シドイシド
 - カクカ
 - ツカレタ (+)
 - その他

埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図

地図13

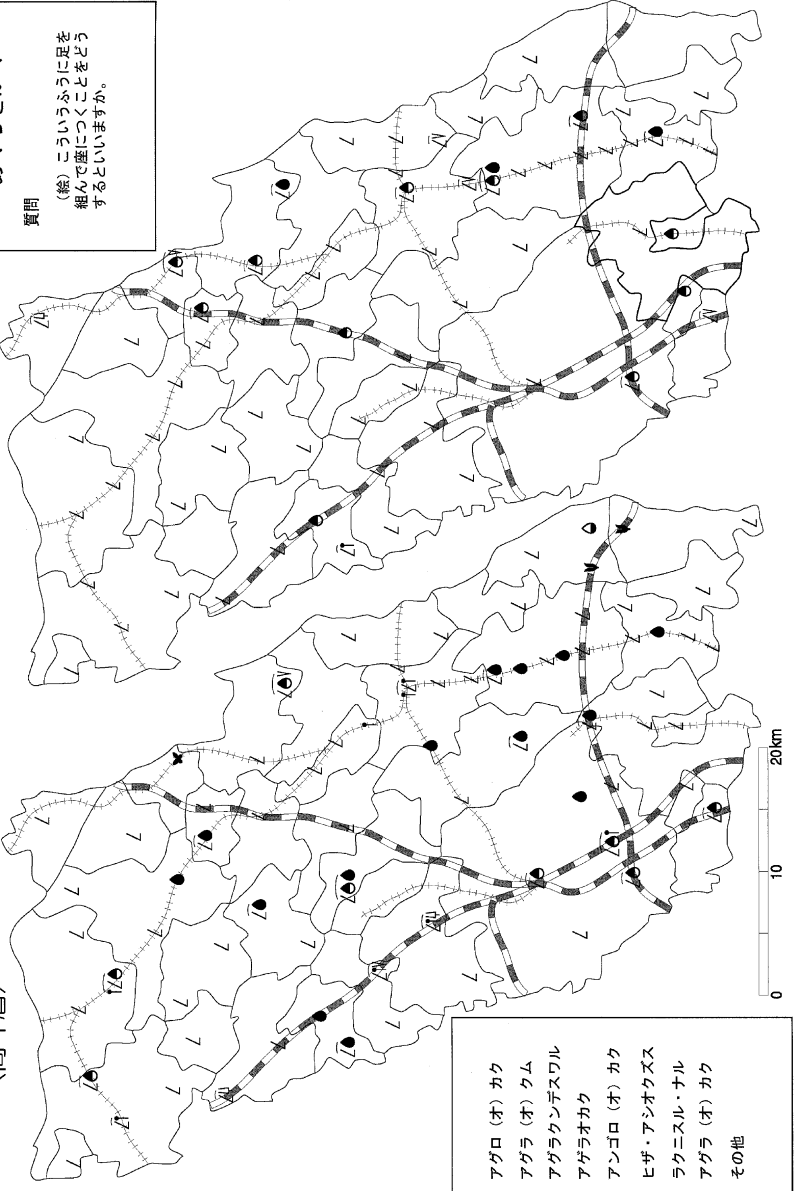
あぐらをかく

質問

(絵) こういうふうな足を
組んで座につくことをどう
するといひますか。

〈中年層〉

〈老年層〉



- | 凡例 | アグロ (オ) カク |
|----|-------------|
| ● | アグラ (オ) クム |
| ○ | アグラクンデスワル |
| ◐ | アゲラオカク |
| ✕ | アングロ (オ) カク |
| ▼ | ヒザ・アシオクスス |
| ∨ | ラクニスル・ナル |
| ∩ | アグラ (オ) カク |
| ∟ | その他 |
| ↑ | |

埼玉県東部言語地図

地図15

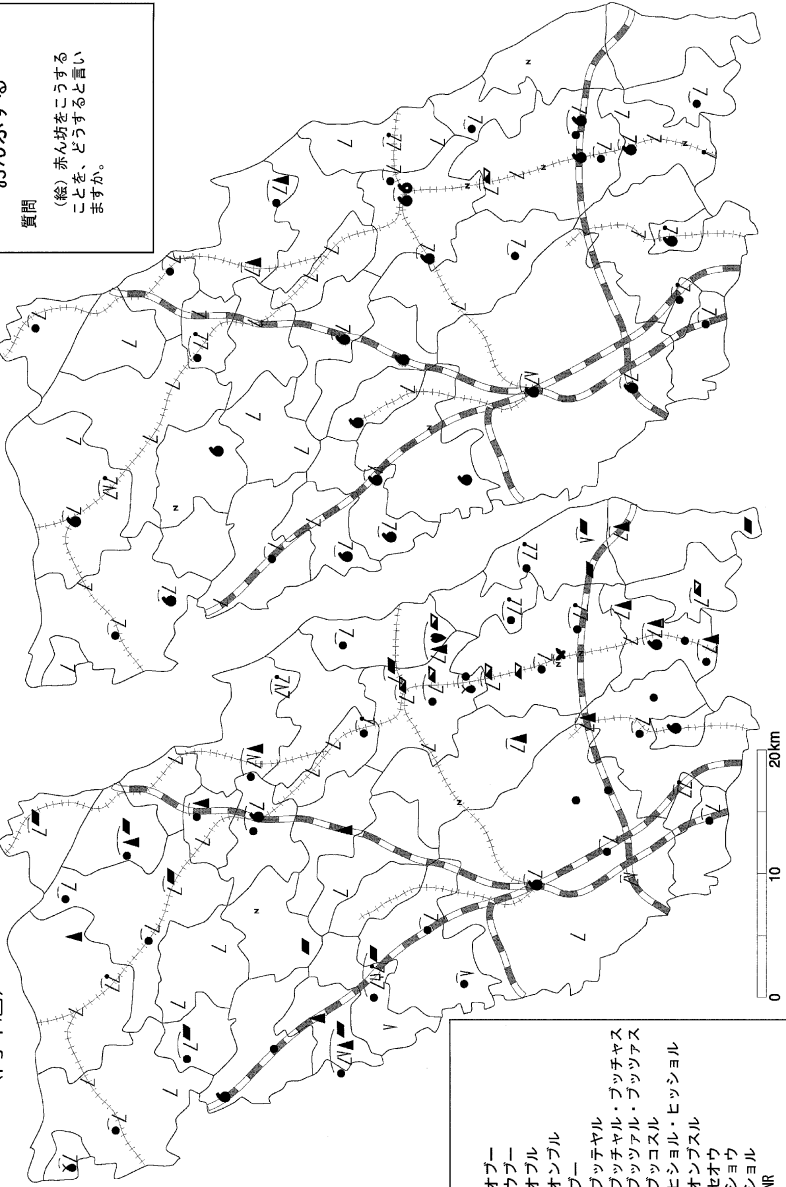
おんぶする

質問

(絵) 赤ん坊をこうする
ことを、どうするといい
ますか。

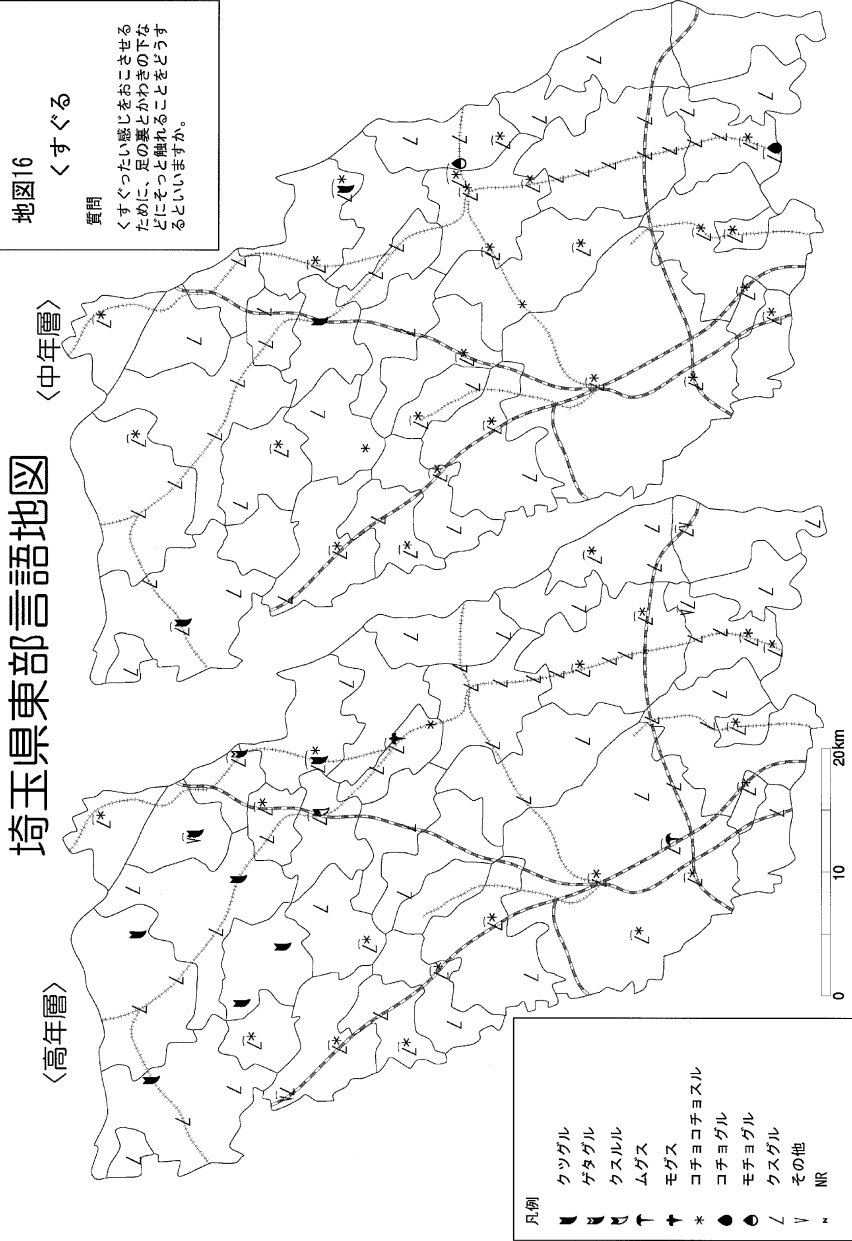
〈中年層〉

〈老年層〉

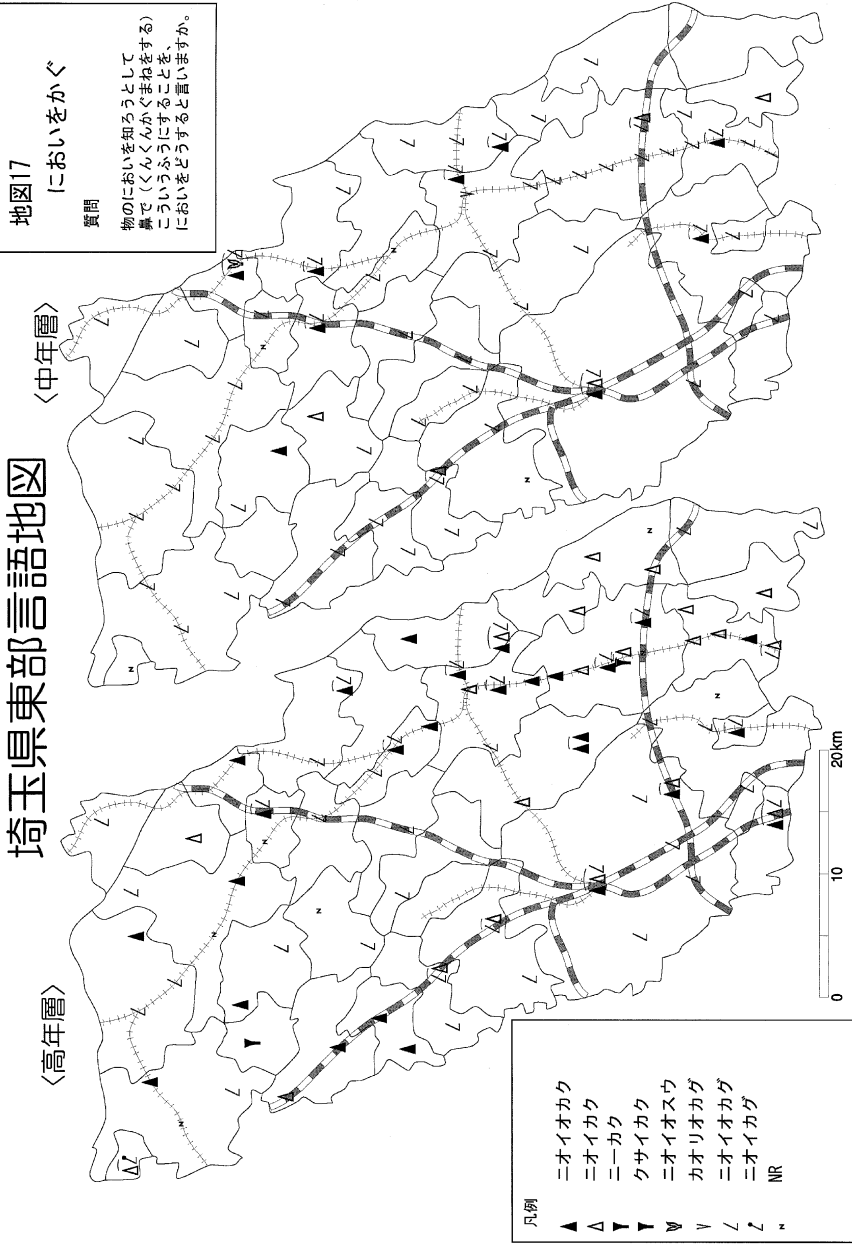


- 凡例
- オブー
 - × ウブー
 - オブル
 - オンブル
 - ▲ フー
 - ▲ フッチャル
 - ▲ フッチャル・フツチャス
 - ▲ フツツアル・フツツアス
 - ▲ フツツスル
 - ▲ フツツスル・フツツスル
 - ▲ ヒンブル
 - ▲ ヒンブル・ヒンシヨル
 - ▲ セオウ
 - ▲ シンヨウ
 - ▲ シンヨル
 - ▲ NR

埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図



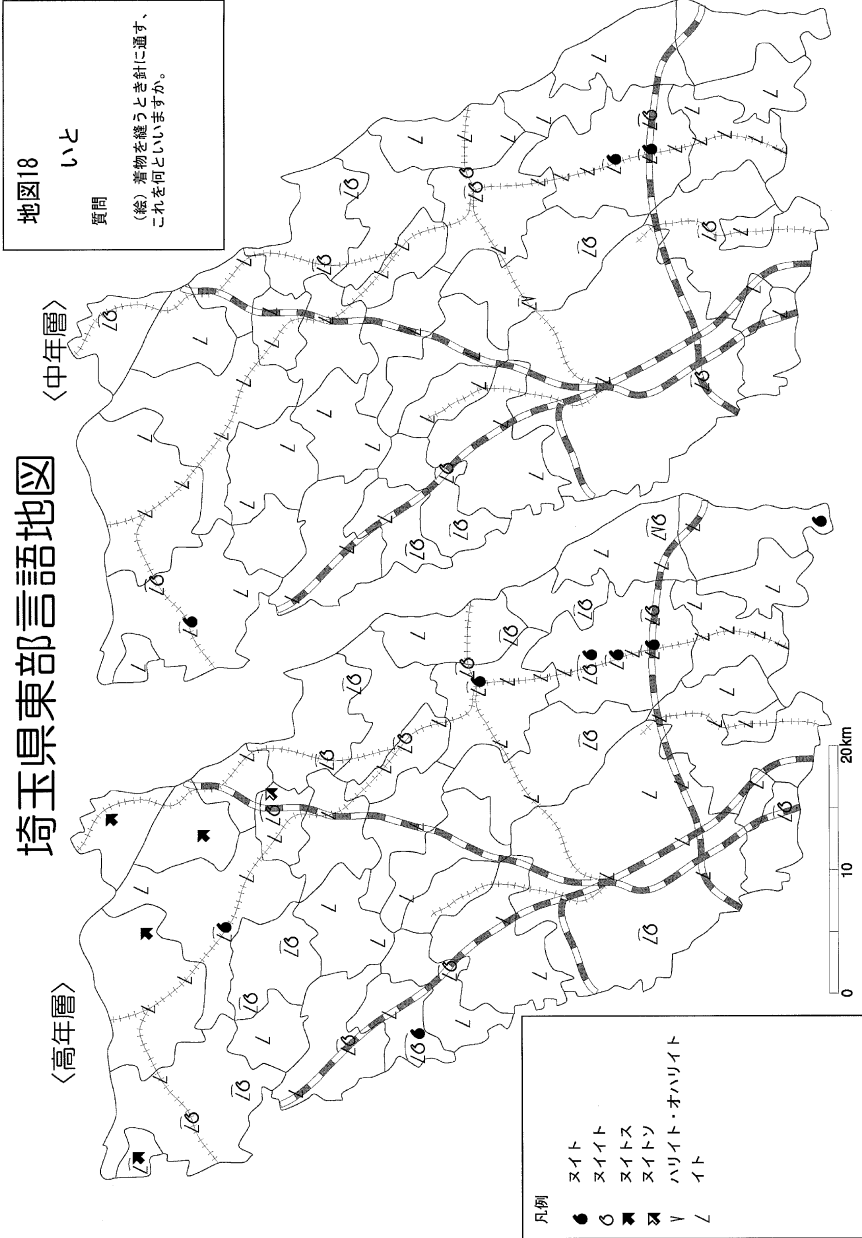
地図17
においをかぐ
質問
物のおいを知らうとして
鼻で(くんくんか)まねをする
こつふうにするのを、
においをとうするをいいますか。

- 凡例
- ▲ ニオイオカク
 - △ ニオイカク
 - ▼ ニーカク
 - ▽ クサイカク
 - ▽ ニオイオスウ
 - ▽ カオリオカク
 - ▽ ニオイオカク
 - ▽ ニオイカク
 - NR

埼玉県東部言語地図

〈中年層〉

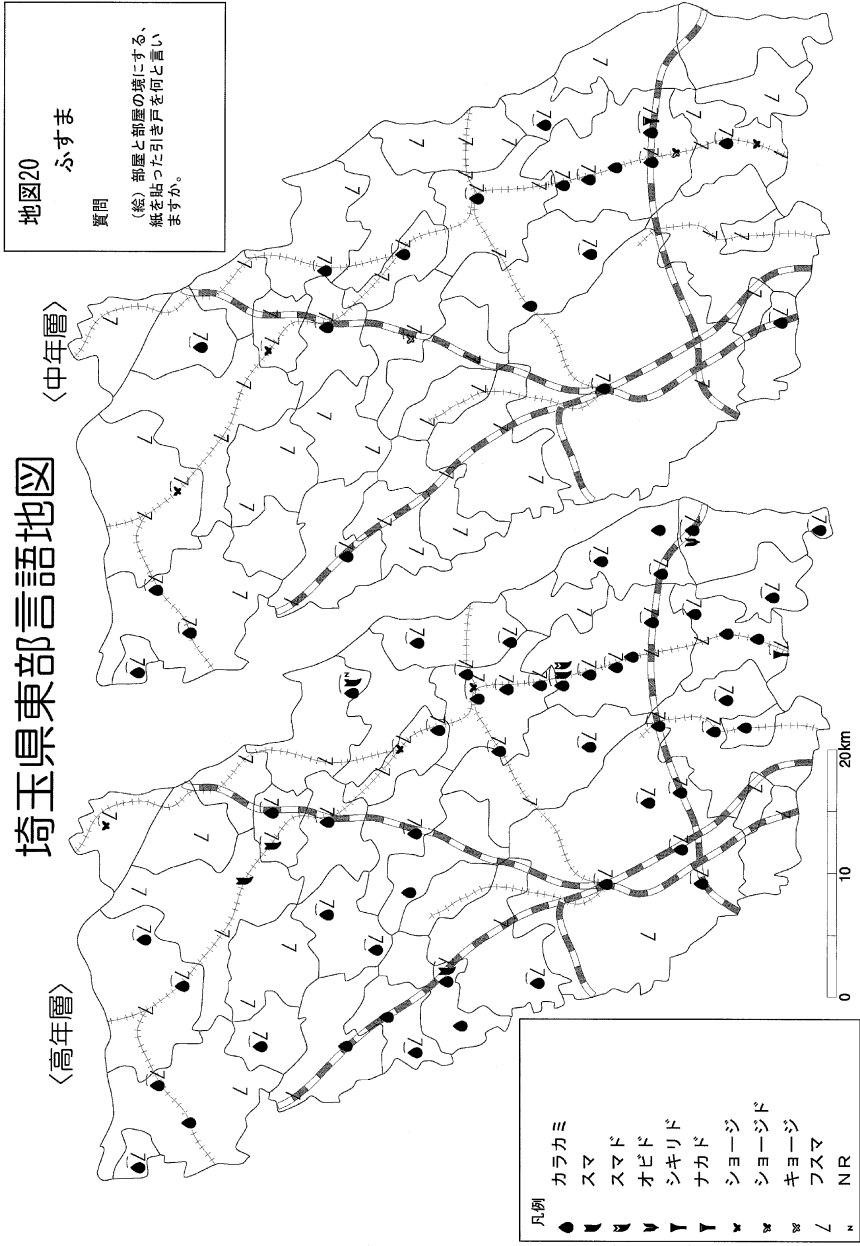
〈老年層〉



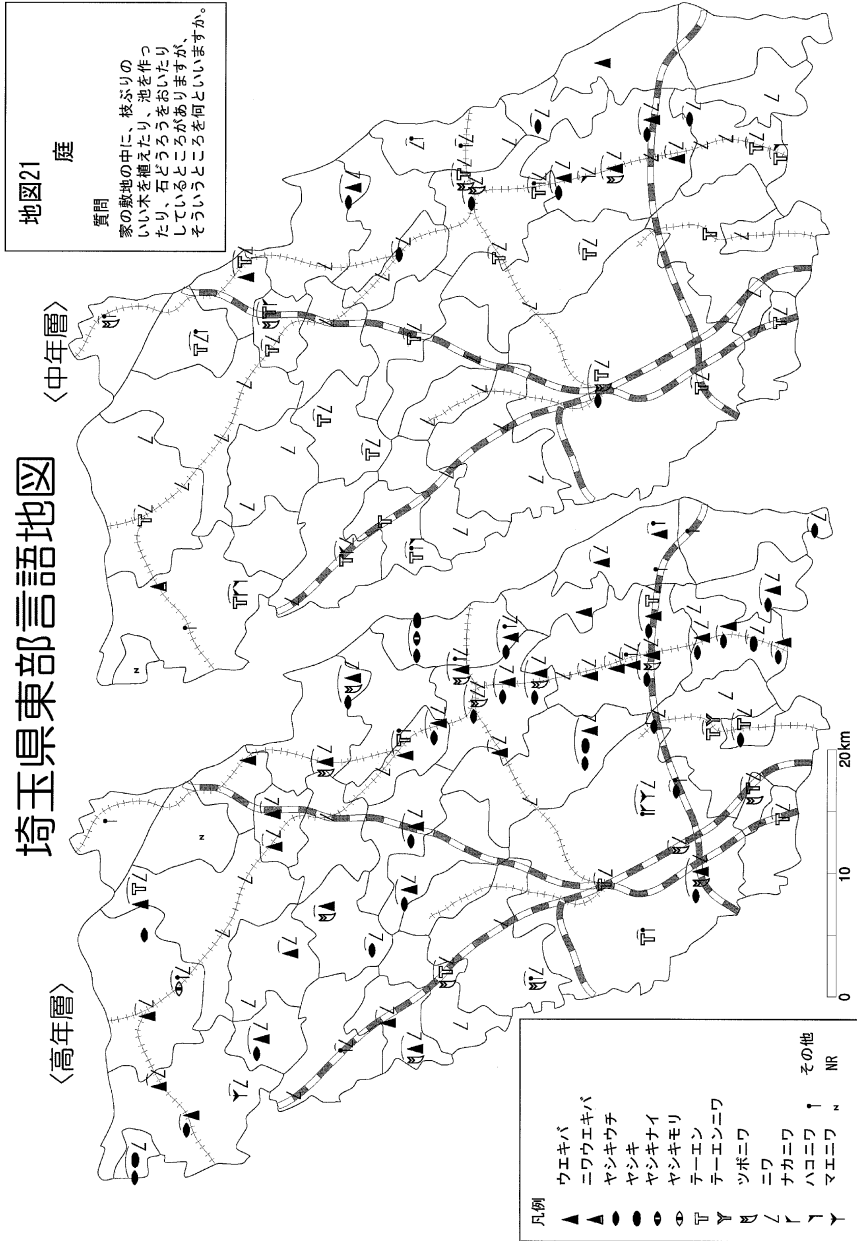
地図18
いと
質問
(絵) 着物を縫うとき斜に通す、
これを何といますか。

- 凡例
- ヌイト
 - ヌイイト
 - ✕ ヌイイト
 - △ ヌイト
 - ハリイト・オハリイト
 - ┆ イト

埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図

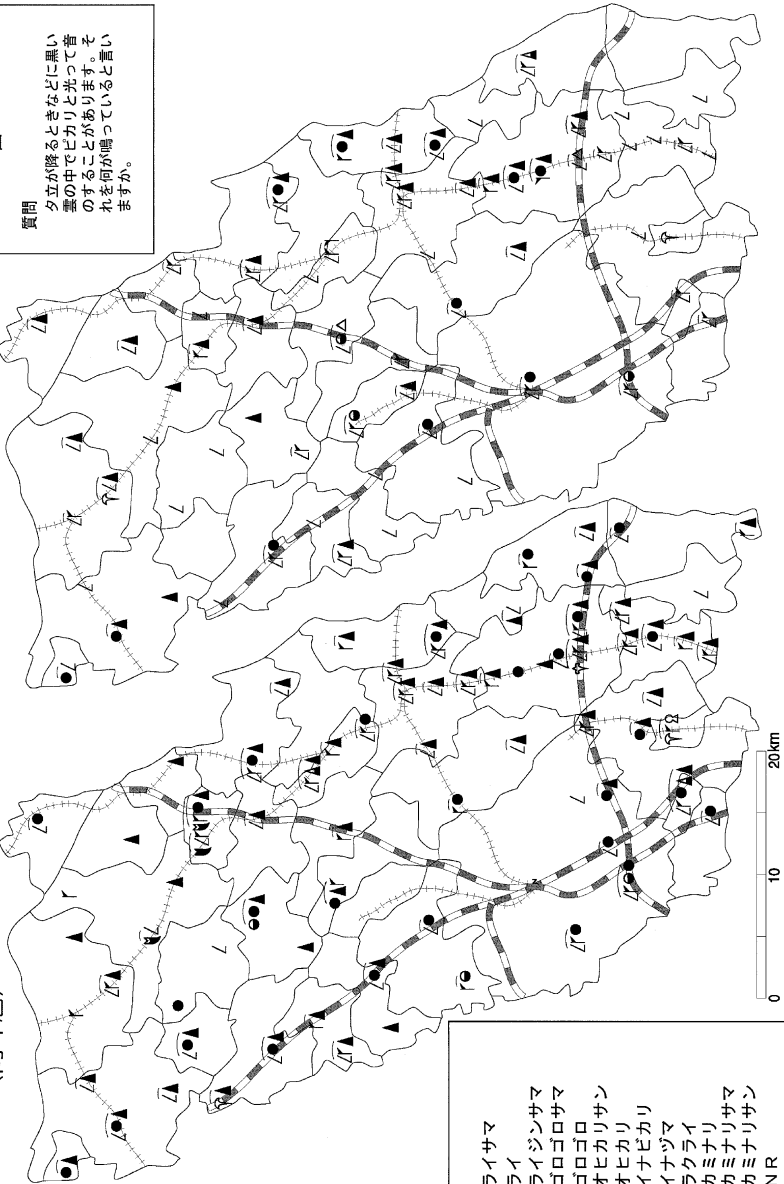
地図22

雷

質問
夕立が降るときなどに黒い
雲の中でピカリと光って音
のするところがあります。そ
れを何が鳴っていると言
いますか。

〈中年層〉

〈高年層〉



- 凡例
- ▲ ライサマ
 - △ ライ
 - ライジンサマ
 - コゴロサマ
 - ◐ コゴロ
 - ◑ オビカリサン
 - ◒ オビカリ
 - ◓ イナビカリ
 - ◔ イナツマ
 - ◕ ラクライ
 - ◖ カミナリサマ
 - ◗ カミナリサン
 - NR

埼玉県東部言語地図

地図23

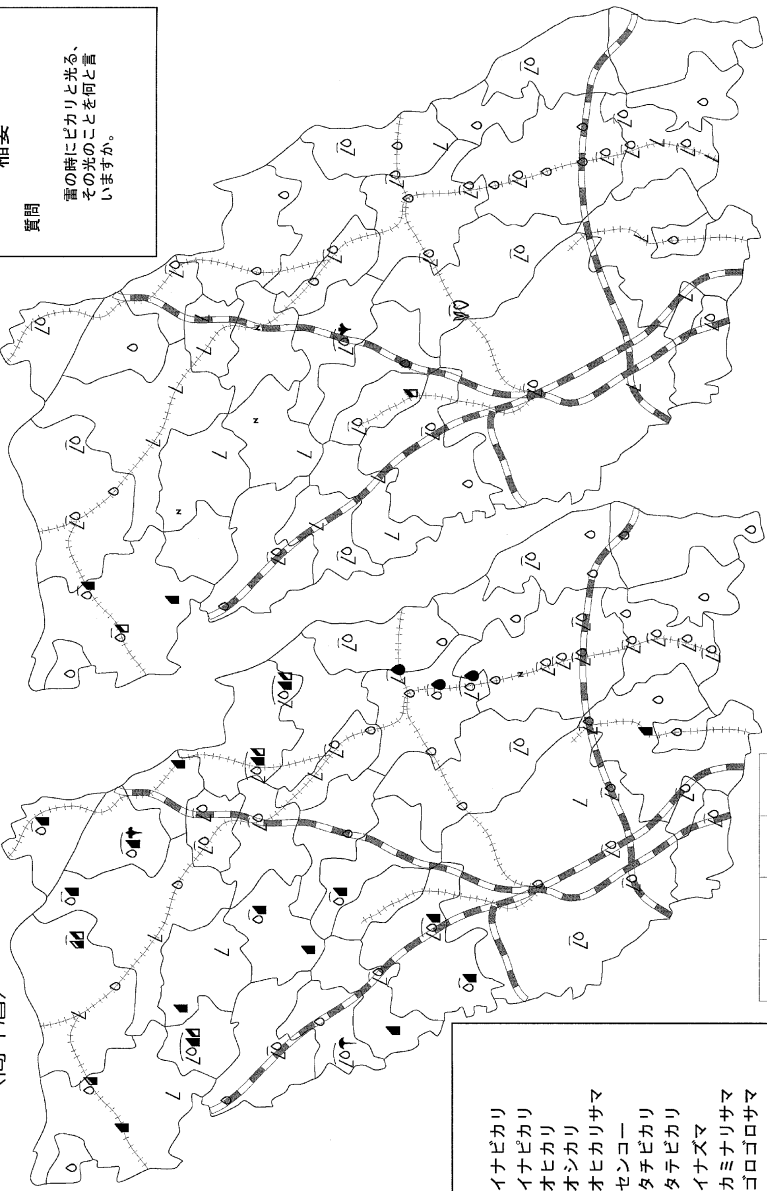
稲妻

質問

雷の時にピカリと来る、
その光のことを何と言
いますか。

<中年層>

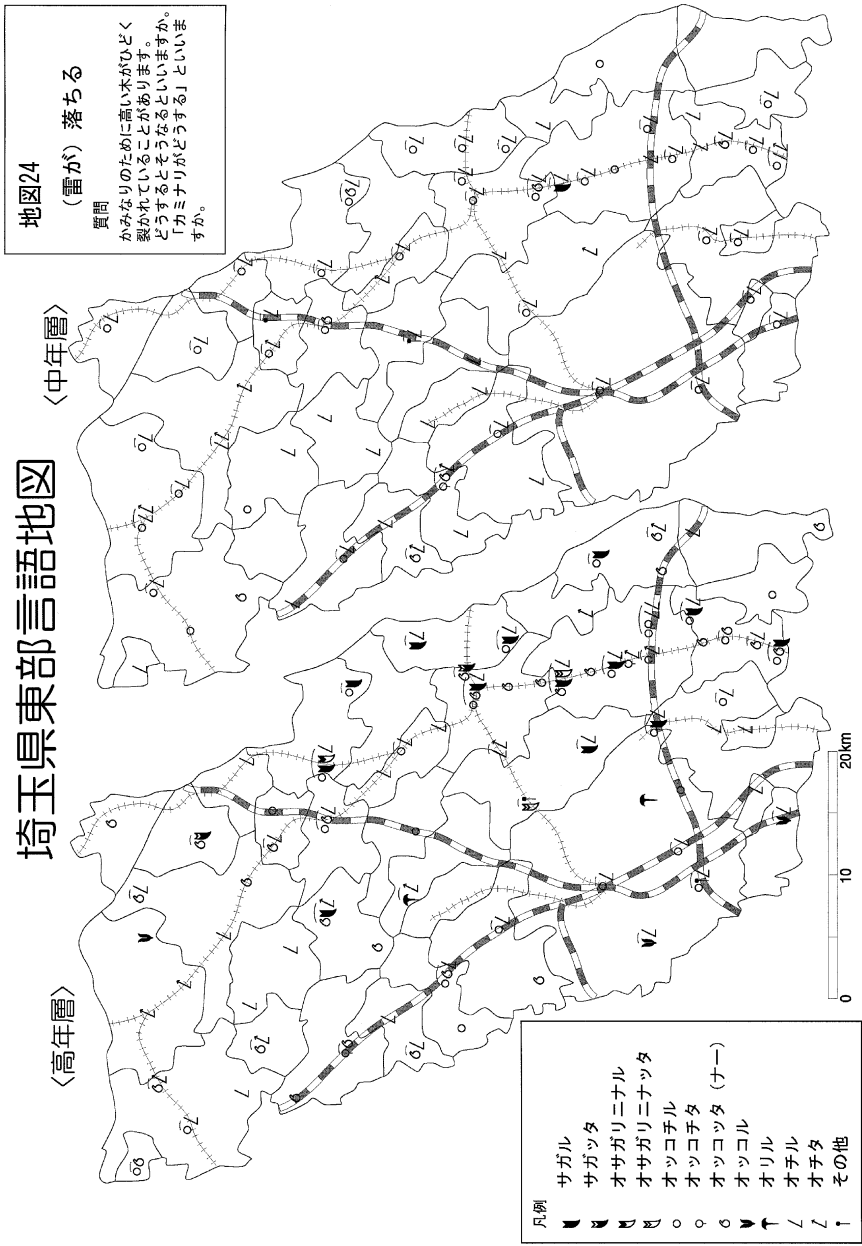
<老年層>



凡例

- イナピカリ
- イナピカリ
- ▲ オヒカリ
- ▲ オシカリ
- ▲ オヒカリサマ
- ▲ センコー
- ▲ タチピカリ
- ▲ タチピカリ
- ▲ イナズマ
- ▲ カミナリサマ
- ▲ コロコロサマ
- ▲ NR

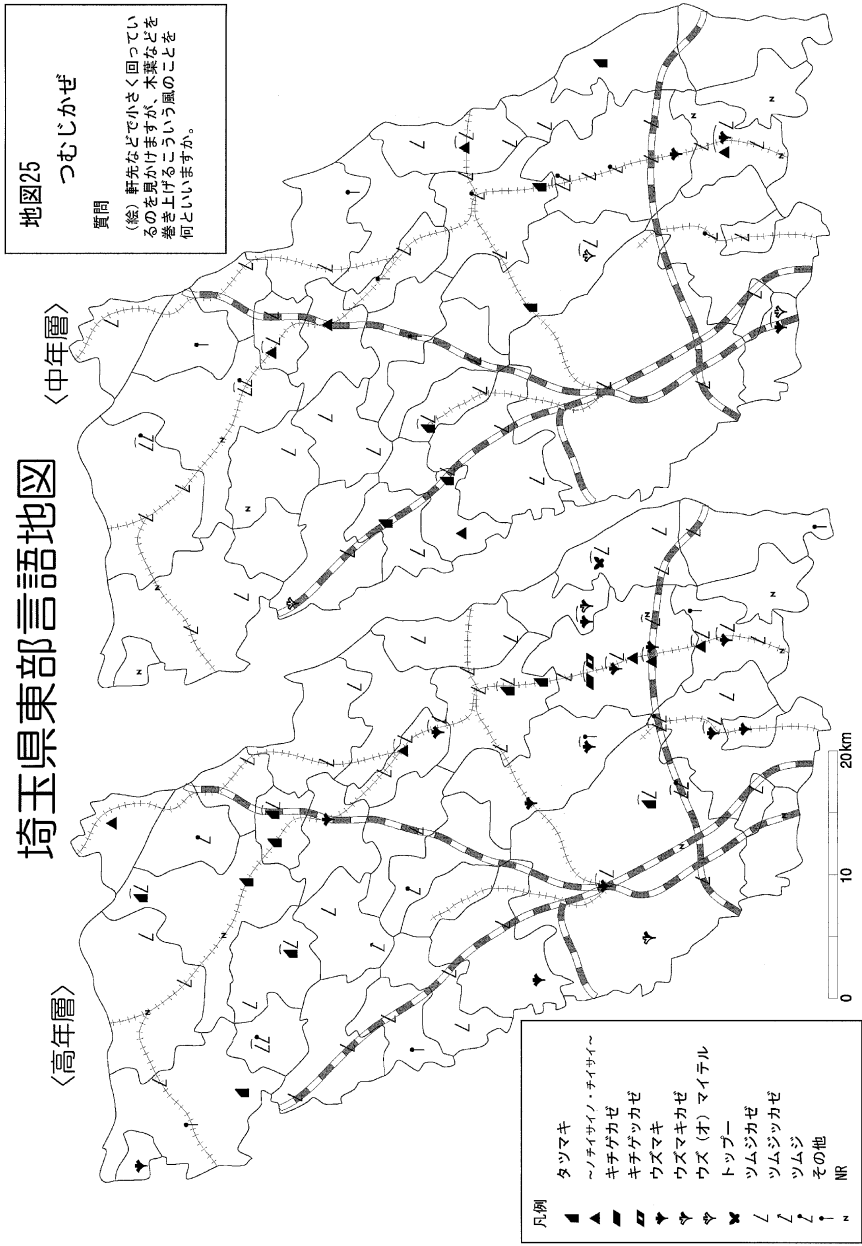
埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図

〈高年層〉

〈中年層〉



地図25

つむじかぜ

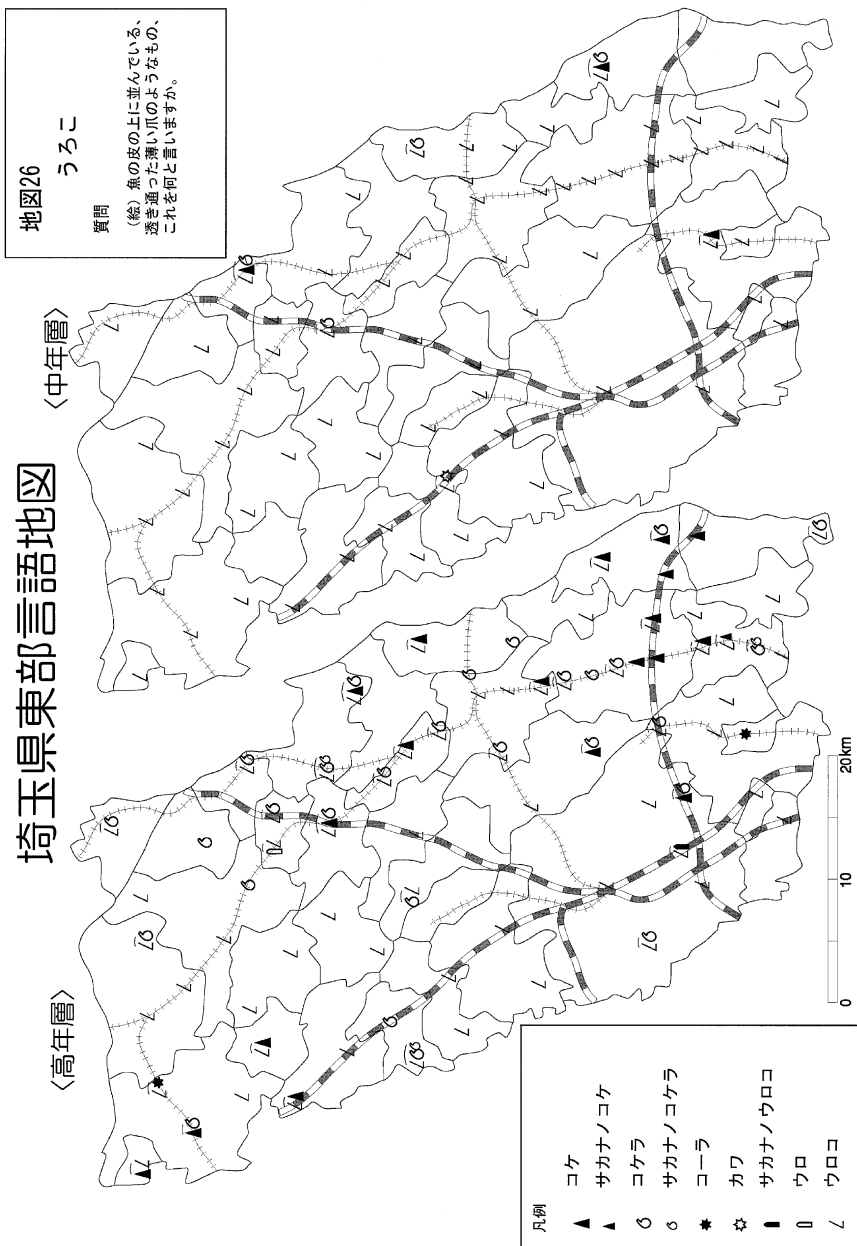
質問

(絵) 駅先などで小さく回っているのを見かけますが、木葉などを巻き上げるこういう風のことを何と叫びますか。

凡例

- タツマキ
- ▲ ~ノチイサイノ・チイサイ~
- ▲ キチガカゼ
- ▲ キチゲツカゼ
- ▲ ウズマキ
- ▲ ウズマキカゼ
- ▲ ウズ(オ)マイテル
- ▲ トツプー
- ▲ ツムジカゼ
- ▲ ツムジツカゼ
- ▲ ツムジ
- ▲ その他
- NR

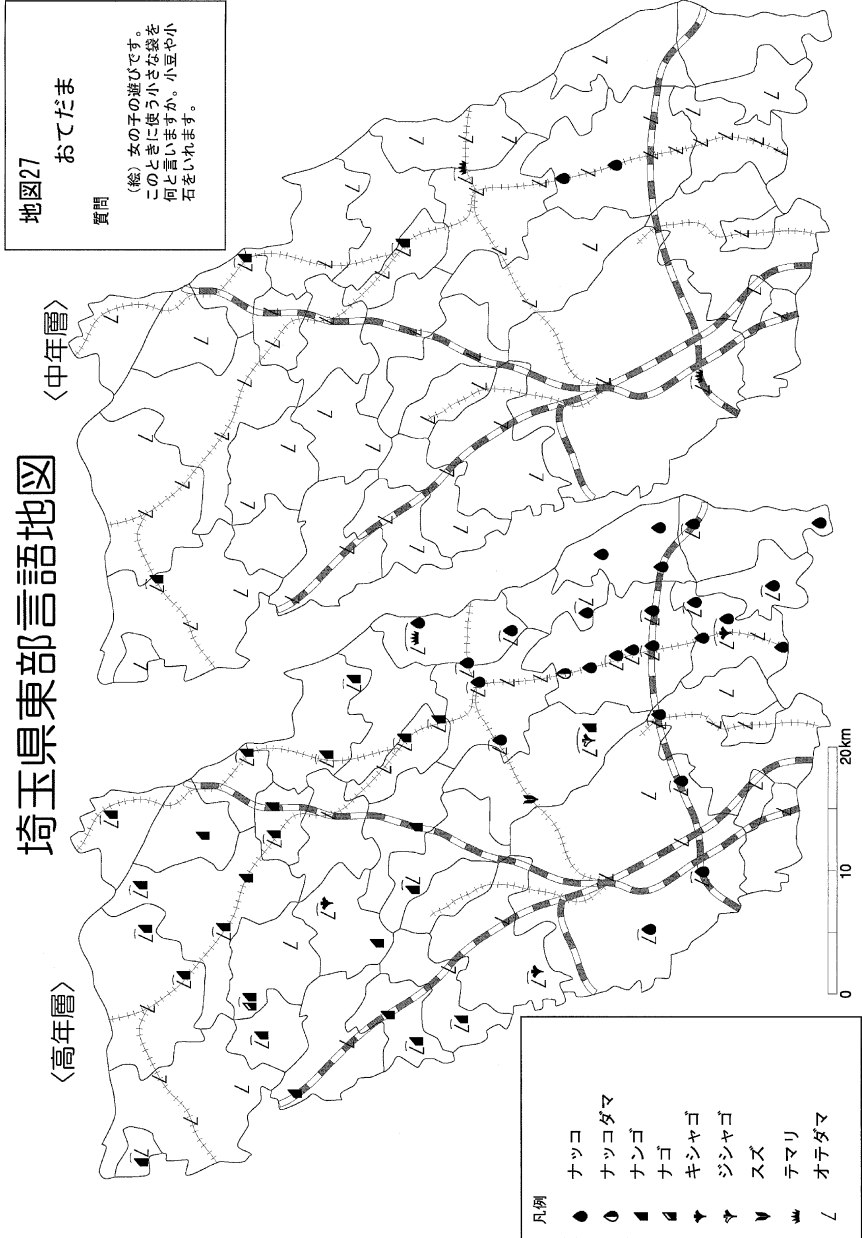
埼玉県東部言語地図



埼玉県東部言語地図

〈高年層〉

〈中年層〉



地図27

おてだま

質問

(絵) 女の子の遊びです。
このときに使う小さな石を
何と言いますか。小豆や小
石をいれます。

- 凡例
- ナッコ
 - ナッコダマ
 - ▲ ナンゴ
 - ▼ ナゴ
 - ◆ キシヤゴ
 - ◇ ジシヤゴ
 - ▽ スズ
 - ▲ テマリ
 - オテダマ
 - △

埼玉県東部言語地図

地図28

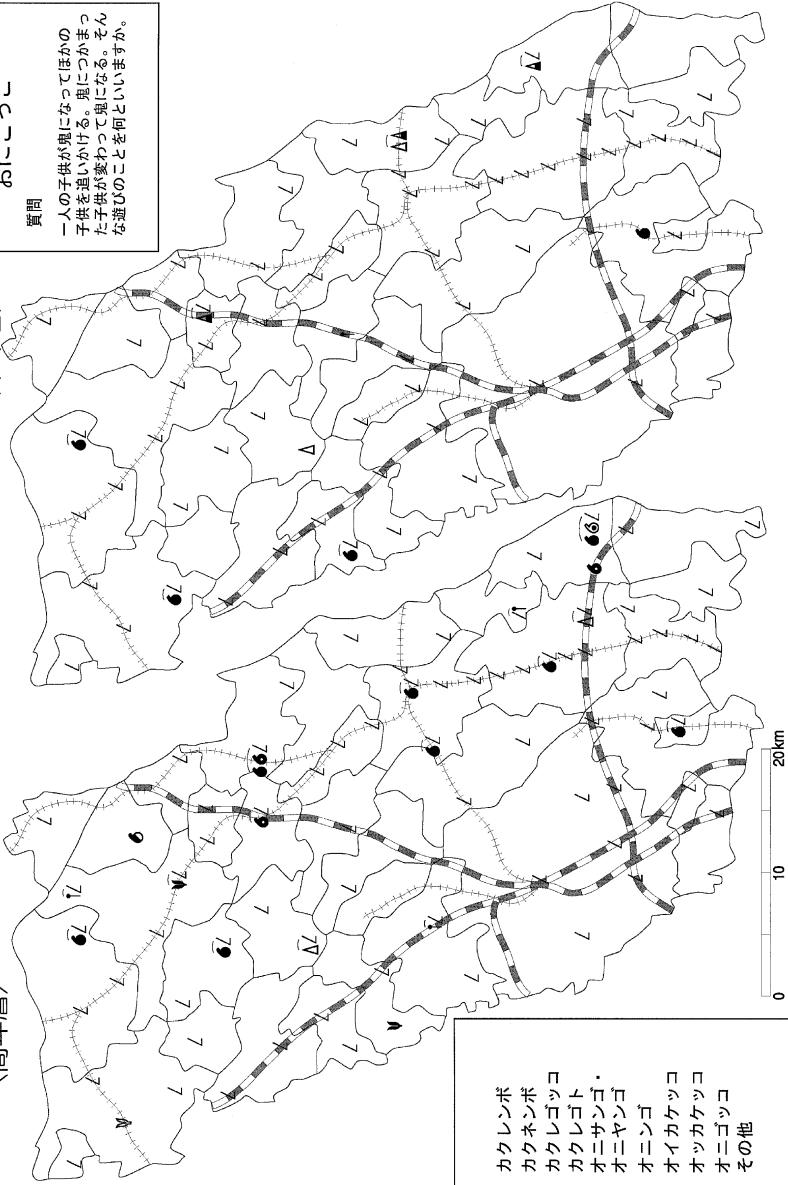
おにごっこ

質問

一人の子供が親になってほかの子供を追いかける。現につかまった子供が寝たことになり、そんな遊びの事になりますか。

〈中年層〉

〈老年層〉



- 凡例
- カクレンボ
 - カクネンボ
 - カクレゴッコ
 - カクレゴト
 - ▼ オニサンゴ・オニヤンゴ
 - ▼ オニヤンゴ
 - ▼ オイカケッコ
 - ▼ オッカケッコ
 - ▼ オニゴッコ
 - ▼ その他

埼玉県東部言語地図

地図29

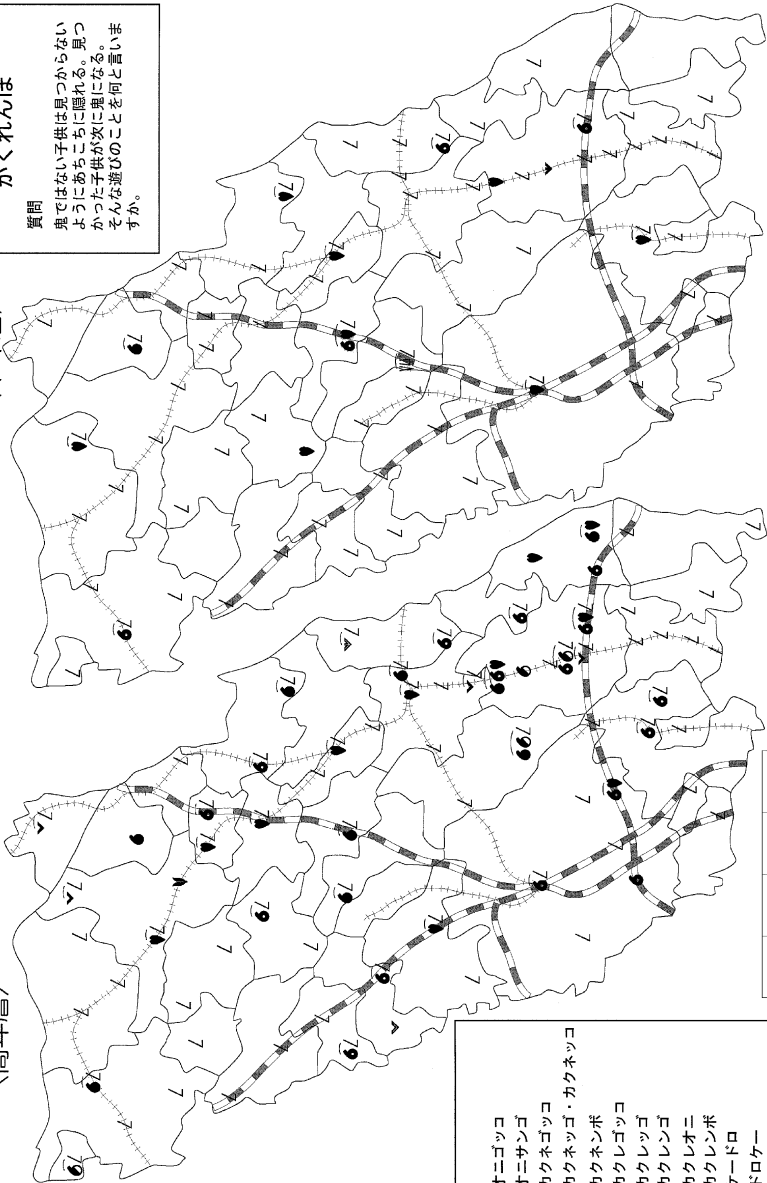
かくれんぼ

質問

鬼でははない子供は鬼つかからないようにあちこちに隠れる。見つかった子供が次に鬼になる。そんな遊びのことを何と言いますか。

〈中年層〉

〈高年齢層〉



- 凡例
- オニゴッコ
 - ▼ オニサンゴ
 - カクネゴッコ
 - カクネツゴ・カクネッコ
 - カクネンボ
 - ▼ カクレゴッコ
 - ▼ カクレツゴ
 - ▼ カクレオニ
 - ▼ カクレンボ
 - ▼ ケードロ
 - ▽ ドロケー
 - ▽ ドロボーゴッコ

埼玉県東部言語地図

